

小高町文化財調査報告書第1集

萩原遺跡

1993年3月

福島県相馬郡小高町教育委員会

序 文

当町は、国指定史跡薬師堂石仏附阿弥陀仏堂石仏などをはじめとして、歴史的にも重要な史跡があり、専門家の先生のご指導を受けながら、この保存修理事業に取り組んでおります。この保存修理事業をすすめる中で、私ども教育委員会関係者は、文化財保護の重要性に、ますます認識を深めております。

また、指定された文化財だけでなく、埋蔵文化財についても同様であります。表面に出ないだけに気がつかないでしまえば、最近の開発に伴う工事はこの機械力により、大きな山が1日にして平地となってしまう状況であり、遺跡等もすぐに破壊してしまう危険性があります。

反面、県内、県外ともに埋蔵文化財についての意識が高まり、各地で素晴らしい遺跡が発見され、公開されることにより、埋蔵文化財に対する認識も高まりをみせてきております。私達教育行政に携わる者は、文字を持たない時代の貴重な文化遺産を、私達の代だけでなく、後世にも保存してゆく責任があります。

今回は原町建設事務所と会議を重ね、県道相馬・浪江線の拡幅工事にともなう、荻原遺跡への試掘調査を実施した結果について、小高町文化財報告第1集として発行いたしますが、これは、今後小高町の文化財報告書を継続的に発行してまいりたいと考え、この名称にしたものです。

今回の発掘調査のなかでも、縄文時代の住居跡が発掘されるなど、当町各地で見られる、縄文時代の遺物等の発見された、生活状況を判断するのに必要なものはほとんど出土し、当時の生活状態がよくわかる報告書となりました。

今回の発掘調査にあたっては、調査を担当していただきました、県立原町高等学校教諭 玉川一郎先生をはじめ、調査員の皆さん、地元の発掘作業員の皆さん、建設事務所の皆さんより大変なご協力をいただきました。ここに関係者の皆様に深く感謝を申し上げ、序文といたします。

平成5年3月

小高町教育委員会

教育長 木 幡 喜久治

例 言

- 1 本報告書は平成4年度に実施した、福島県相馬郡小高町羽倉字萩原に所在する萩原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 この発掘調査は、県道相馬・浪江線の拡幅工事に伴う事前調査として、事業主体者である福島県原町建設事務所の委託を受け、小高町教育委員会が調査主体となって実施した。
- 3 発掘調査は、平成4年7月28日から9月13日にかけて実施した。調査面積は500㎡である。
- 4 資料整理・報告書の作成は、平成4年9月14日から平成5年3月31日にかけて実施した。
- 5 出土した資料のうち、石器および石製品の石質鑑定は、福島県立双葉高等学校教諭高木和夫氏に依頼し、鑑定結果の提出を受けた。
- 6 本書は、調査担当者である玉川一郎が執筆・編集した。したがって、本書にたいする責任は、玉川が負うものである。
- 7 本書に収録した遺構図および遺物の実測・トレース・割付けは、玉川の指示のもと、市川佐知子が行なった。
- 8 発掘調査および報告書の刊行にあたり、次の方々からご協力・ご教示をいただいた。
武田耕平（原町市教育委員会） 丸山泰徳・原 充広（財団法人福島市振興公社） 鈴鹿良一
鈴鹿八重子 福島県教育委員会文化課 財団法人福島県文化センター遺跡調査課
福島県原町建設事務所 （敬称略）
- 9 本書内の実測図中の方位は、磁北を示している。
- 10 遺構図の▲は焼土を表示した。
- 11 この調査で得られた資料は、小高町教育委員会が所蔵している。

目 次

序	文	
例	言	
目	次	
第1章	荻原遺跡の位置と調査の経過	1
第1節	荻原遺跡の位置と環境	1
1	遺跡の位置	
2	自然の環境	
3	歴史的な環境	
第2節	調査の経過と方法	4
1	調査に至る経過	
2	調査の方法	
3	調査の経過	
第2章	検出された遺構と遺物	8
第1節	竪穴住居跡と出土遺物	8
1	第1号住居跡	
2	第2号住居跡	
3	第3号住居跡	
4	第4号住居跡	
第2節	土坑と出土遺物	16
1	縄文時代の土坑	
2	時期が不明な土坑	
第3節	その他の遺構と出土遺物	19
1	焼土跡	
2	溝状遺構	
第4節	遺物包含層と出土遺物	21
1	包含層の分布	
2	縄文土器	
3	石器	
第3章	調査のまとめ	27
1	縄文時代の集落	
2	縄文時代以外の遺構	

挿 図 目 次

第 1 図	荻原遺跡の位置	1	第 11 図	第 4 号住居跡	15
第 2 図	荻原遺跡の周辺遺跡と地名表	3	第 12 図	第 4 号住居跡出土遺物	16
第 3 図	工事計画と調査の範囲	5	第 13 図	第 2・7・8 号土坑	17
第 4 図	調査区全体図	7	第 14 図	第 2・7・8 号土坑出土遺物	18
第 5 図	第 1 号住居跡	8	第 15 図	第 1・3～5・9・10 号土坑	20
第 6 図	第 1 号住居跡出土遺物	9	第 16 図	遺物包含層出土遺物(1)	22
第 7 図	第 2 号住居跡	10	第 17 図	遺物包含層出土遺物(2)	23
第 8 図	第 2 号住居跡出土遺物	11	第 18 図	遺物包含層出土遺物(3)	25
第 9 図	第 3 号住居跡	13	第 19 図	遺物包含層出土遺物(4)	26
第 10 図	第 3 号住居跡出土遺物	14			

表 目 次

第 1 表	遺物包含層出土石器一覧	24
-------	-------------	----

図 版 目 次

図版 1	1 荻原遺跡の遠景(北から)	図版 7	1 第 7 号土坑(南から)
	2 荻原遺跡の近景(北から)		2 第 8 号土坑(南から)
図版 2	1 調査区全景(北から)	図版 8	1 第 1 号土坑と堆積状況(西から)
	2 調査区中央部の状況(北から)		2 第 9 号土坑(東から)
図版 3	1 第 1・2 号住居跡の重複状況(北から)	図版 9	1 第 1・2 号住居跡出土の縄文土器
	2 第 1 号住居跡(西から)		2 第 3 号住居跡出土の縄文土器
図版 4	1 第 2 号住居跡(西から)	図版 10	1 第 4 号住居跡, 第 2・7・8 号土坑 出土の縄文土器
	2 第 3 号住居跡(南から)		2 遺物包含層(Ⅱ層)出土の縄文土器
図版 5	1 第 4 号住居跡(北から)	図版 11	第 2 号住居跡・第 2 号土坑・遺物包含 層(Ⅱ層)出土の石器
	2 第 4 号住居跡と堆積状況(東から)	図版 12	第 3 号住居跡・遺物包含層(Ⅱ層)出土 の石器
図版 6	1 第 1・2 号焼土跡と台石(東から)		
	2 第 2 号土坑(北から)		

第1章 荻原遺跡の位置と調査の経過

第1節 荻原遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置

荻原遺跡は、福島県相馬郡小高町羽倉字荻原に所在する縄文時代早期末葉の集落遺跡である。JR常磐線小高駅の略西方6kmの地点にあり、羽倉行政区の公会堂の西側丘陵部が遺跡の範囲と考えられる。遺跡の西方1.5kmには、阿武隈山地東縁を画する久ノ浜－岩沼構造線が南北方向に走っている。

2 自然の環境

遺跡のある小高町は、福島県浜通り地方に所在する人口15,000人程の町である。浜通り地方は、阿武隈山地の東側の太平洋沿岸地域を包括するが、一般的にこの地域の地形は、阿武隈山地東縁の久ノ浜－岩沼構造線を境として、東側の太平洋岸までの間には、東に延びる相双丘陵とそれを開析した河岸段丘・海岸段丘で構成されるという特色をもっている。



第1図 荻原遺跡の位置

(1 : 50,000)

第1節 荻原遺跡の位置と環境

小高町は、東流して太平洋に注ぐ小高川の河川流域を主たる行政区域としているが、小高川は市街地の西でその支流である前川と合流する。前川はさらに上流において、大富川と合流するが、この合流点あたりから、地元では羽倉川と呼んでいる。小高川およびその支流には、これらの小河川によって形成された河岸段丘が、5ないし6面観察され、その間には、基盤を第三紀層とする丘陵地(相双丘陵)が残丘として、低い標高を残している。

荻原遺跡は南の大富川と北の羽倉川に挟まれた、東西に延びる段丘および丘陵の中に位置する。この地域は周辺に、西から低くなる数段の段丘面が形成され、中心部に丘陵が残丘として観察される。遺跡は標高70m程の、丘陵状の地形面に立地するが、東・南・北はこの地域に広く形成される第4段丘面に取り巻かれる。この丘陵状地形面の下層2mには段丘礫層があり、現在は遺跡の立地地面を、第3段丘面と考えておきたい。

遺跡の周辺では、第4段丘以下の面は畑地および水田として土地利用がなされているが、第3段丘面より高位面は山林が一般的である。

3 歴史的な環境

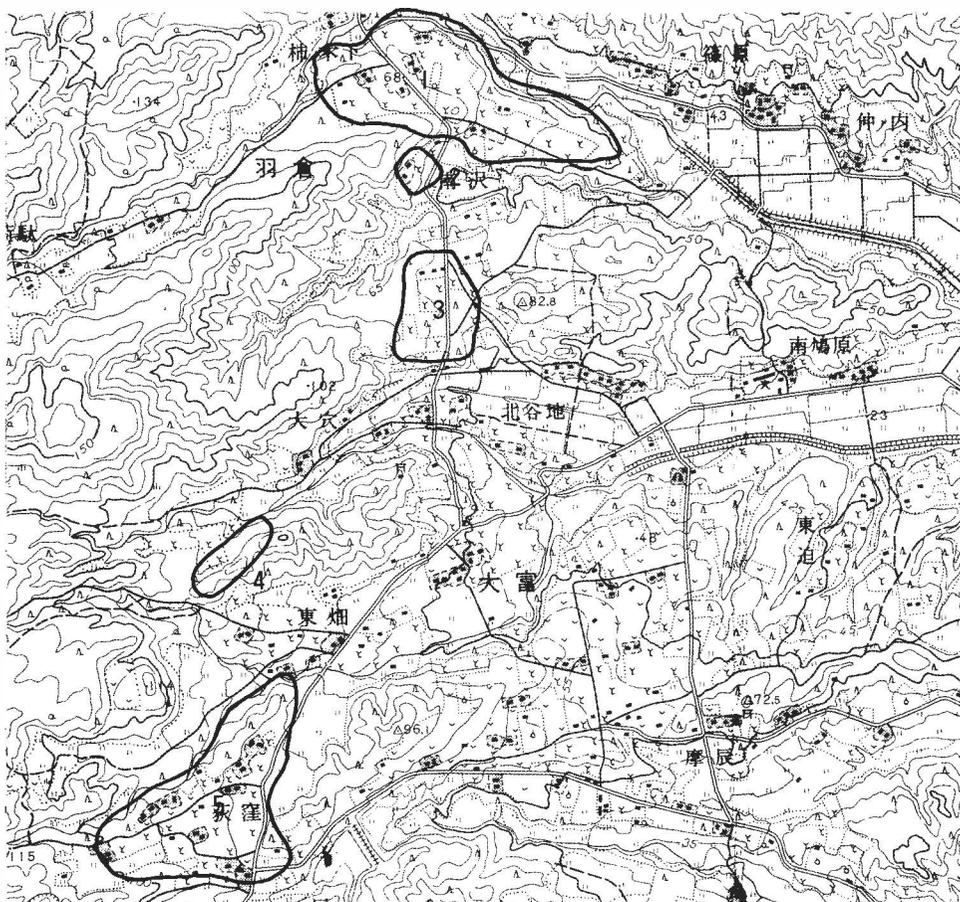
小高川流域は、縄文海進を考古学的に考える上で貴重な地域である。すなわち、荻原遺跡の南東4kmの地点には、縄文時代前期大木2a式期に形成された片草貝塚がある。この貝塚は、現汀線より4.5km内奥に位置しており、アサリを主体とする貝塚である点から考えても、縄文時代前期には小高川流域の広範な地域が、内湾的な地形環境にあったことを教えてくれる。

縄文海進が顕著であった縄文時代早期末から前期初頭の時期、この時期の集落遺跡は小高川北岸の段丘上に点々と確認されるが、遺跡の内容が明らかになったものは少ない。小高川上流域では、今回調査した荻原遺跡が範囲も広く、拠点的な集落遺跡と考えられる。荻原遺跡は、かつては南沢遺跡・川久保遺跡・荻原遺跡として登録された遺跡であるが、県営かんがい排水事業請戸川地区に伴う遺跡分布調査によって、50,000㎡をこえる大規模遺跡として再登録されている。羽倉川の、遺跡の北岸の段丘面にある原町市八重米坂A遺跡も、年代的には荻原遺跡と同年代の集落遺跡である。

縄文時代中期から後期にかけての拠点集落遺跡が、南西2.5kmにある大富西畑遺跡である。平成3年、県営かんがい排水事業請戸川地区に伴い水路掘削部分の発掘調査が実施され、複式炉をもつ住居跡などが調査されている。小高川上流域の久ノ浜一岩沼構造線より東側の地域は、縄文時代の遺跡が多く所在する地域であるが、分布調査が遅れていて、遺跡の詳細な情報がかめない。

弥生時代以降の遺跡は、小高川の南北両岸の段丘面に濃密な分布をしていて、農耕社会の成立後のこの地域の発展を読み取ることができる。片草地区の段丘面は、片草古墳群を

含む弥生・古墳・奈良・平安時代の大規模な集落遺跡である。また前川南岸の小谷地区にある西台遺跡は、古墳・奈良・平安時代の集落遺跡と考えられているが、特に古墳時代前期の塩釜式土師器が大量に採集される。



番号	遺跡名	所在地	種別	出土異物	時期	備考
1	荻原遺跡	小高町大字羽倉字荻原・南沢・川久保	散布地	縄文土器・石皿・磨石・フリイク	縄文	周知の南沢・荻原・川久保遺跡を含む
2	君ヶ沢遺跡	小高町大字羽倉字君ヶ沢	散布地	羽口・鉄滓	不明	
3	大穴遺跡	小高町大字大富字大穴・北谷地 大字羽倉字君ヶ沢	散布地	石刃・石匙・石核	旧石器 縄文	
4	板木沢遺跡	小高町大字大富字板木沢・大穴	散布地	縄文土器・フリイク	縄文	
5	大富西畑遺跡	小高町大字大富字西畑・東畑・富田・犬塚	散布地	縄文土器・土師器	縄文 古墳～平安	周知

第2図 荻原遺跡の周辺遺跡と地名表

(1:25,000)

第2節 調査の経過と方法

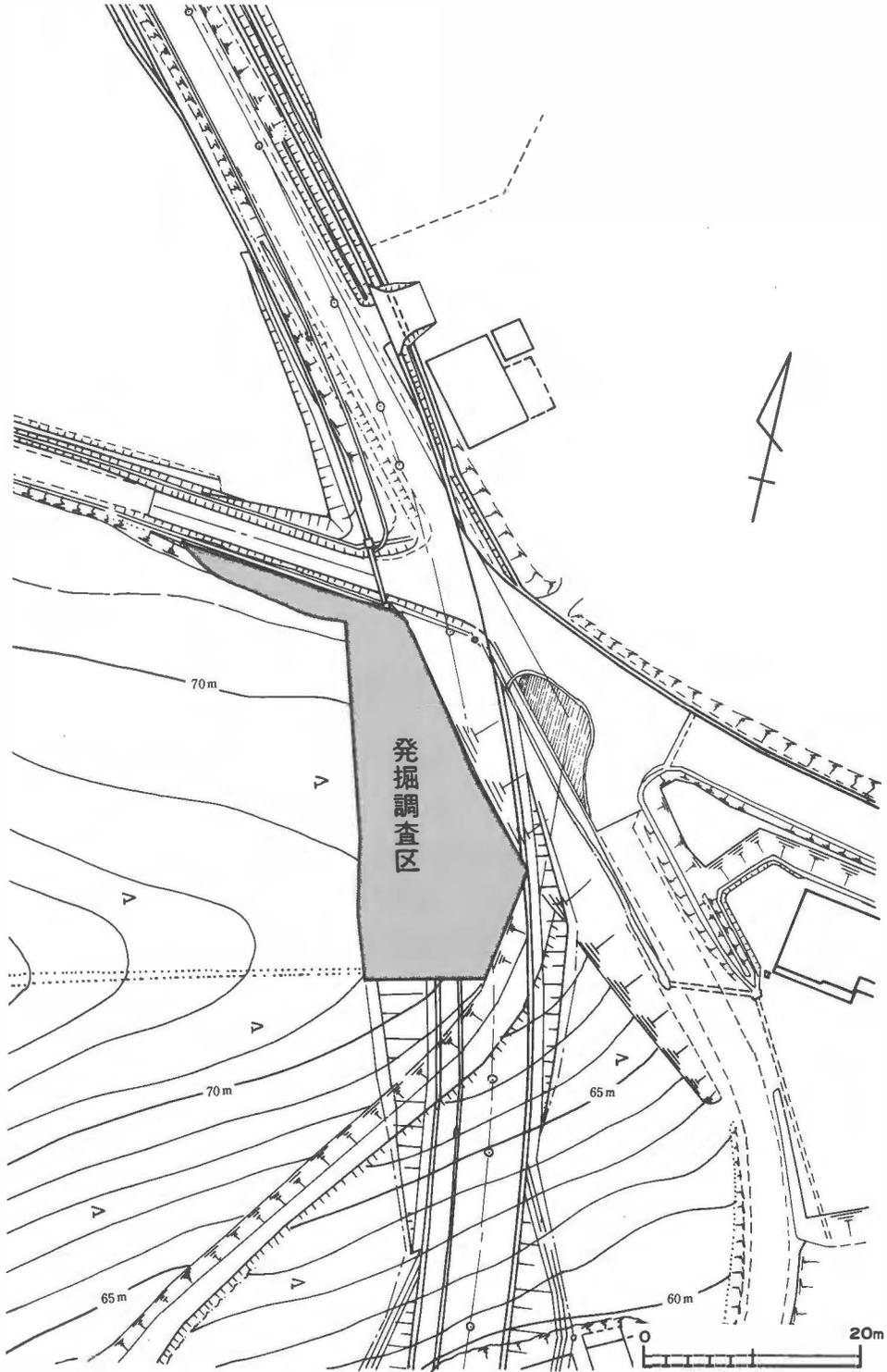
1 調査に至る経過

県道相馬・浪江線は、阿武隈山地東縁を縦貫する基幹道路である。しかしこの県道は幅員も狭く、カーブも多いなど、安全対策上も早急な道路改良が求められている。しかも福島県は、平成7年の国民体育大会の開催県となっており、各種競技場へのアクセス道路の整備も大きな課題となっている。

荻原遺跡は、県道相馬・浪江線を跨いで分布しているが、遺跡の南端では県道のカーブがきつく、この部分での拡幅改良工事は急を要すものであった。しかし道路が遺跡の中を通っているため、道路拡幅は遺跡の内部で行なわざるを得ない状況にある。そこで福島県原町建設事務所と小高町教育委員会との間で遺跡の取り扱いについて協議が行なわれ、平成元年度には福島県教育庁文化課の協力で試掘調査が実施された。試掘調査の結果、遺跡北側の拡幅部分については遺構・遺物もなく、調査は必要ないものと判断されたが、南端の取り付け部分では焼土・土坑などが検出された。

その後の保存協議では、遺跡南端の取り扱いが話し合われたが、最終的には工事計画の変更は不可能との結論に達したので、この部分500㎡について工事に先立って発掘調査を実施することになった。そこで次の体制で発掘調査を計画した。

遺跡の名称	荻原遺跡(おぎわらいせき)
調査の目的	県道相馬・浪江線拡幅工事に伴う事前調査
調査期間	平成4年7月29日～9月13日
調査主体	小高町教育委員会(教育長 齋藤 勝)
調査担当者	玉川 一郎(福島県立原町高等学校教諭・日本考古学協会員)
調査協力者	武田 耕平(原町市教育委員会) 丸山 泰徳(財団法人福島市振興公社) 原 充広(財団法人福島市振興公社) 福島県教育庁文化課 福島県原町建設事務所 大富・羽倉地区の作業員の方々
事務局	小高町教育委員会(事務担当者 社会教育係長 星 義弘)



第3図 工事計画と調査の範囲

第2節 調査の経過と方法

2 調査の方法

調査は、試掘調査で範囲が確定された500㎡を全面調査することとした。ただし、調査区が山林であることと調査期間を考え、表土剥ぎはバックホーを使用せざるを得なかった。遺構の検出・遺構の精査は、層位との関係に十分配慮し、遺物の取り上げにあたっては層位と地点の把握に努めた。

精査の過程は実測図と写真によって記録した。写真は35mmモノクロフィルムとリバーサルフィルムに収めた。

遺構平面図は、調査区に任意の座標軸を設定し調査区全域に方眼紙の割り付けを行い、簡易遣り方測量を行なった。遺構は原則として1/20縮尺で採録したが、土坑の一部は1/10縮尺で実測している。

3 調査の経過

発掘調査は、担当者の玉川の勤務の関係で、夏休みに入った7月29日に開始した。バックホーによる表土剥ぎは7月30日に終了したので、翌31日からは遺構検出作業に着手した。この段階で、調査区のほぼ全域に縄文早期末葉の土器片を含む5～15cmの厚さの黄褐色シルト層が分布していることが明らかになったので、これをⅡ層遺物包含層とした。Ⅱ層を切り込んだ遺構は、壁面に焼土を伴う土坑が数基検出されたものの、縄文時代の遺構はⅡ層中では確認されなかった。

8月5日には、Ⅱ層の調査がほぼ完了し、Ⅲ層の黄褐色シルト層が露呈しはじめた。Ⅲ層は、地山の黄褐色シルト質ローム(Ⅳ層)を覆った、ソフトロームと称すべき土層であるが、この上位面で焼土や、住居跡と思われる遺構の切り込みが確認された。8月7日から住居跡など、遺構の精査に着手し、9日には調査区に基準杭を打設した。

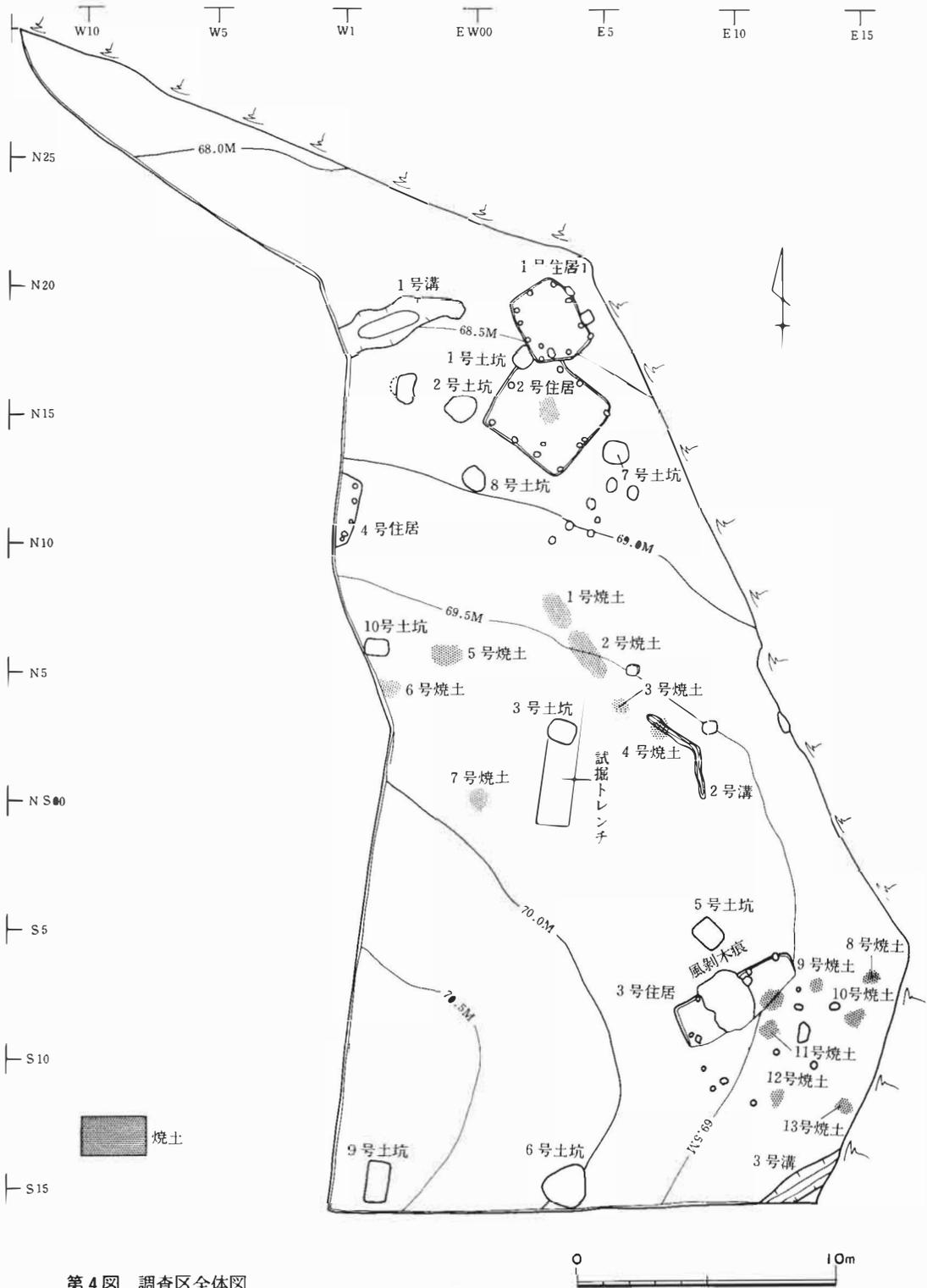
8月11日、4号住居跡を確認したが、遺構の西半は調査区外に入り込んでいるので、検出部分だけを調査することとした。13日から16日までは、盆休みとした。

8月17日には現場作業を再開し、遺構の精査を継続する一方、精査の完了した遺構については写真撮影ならびに実測作業を開始した。8月20日には、1・2号住居跡の周辺でフラスコ状土坑を3基検出し、直ちに精査を行なった。実測作業は24日までにはほぼ終了したが、玉川の夏期休暇が終わったので、以後の調査は土・日曜日を利用して継続することとした。

9月12日は学校週5日制が実施されての最初の土曜休日であったので、この日を利用して現地説明会を開催した。参加者は100人弱であった。

9月13日・20日には住居床面や焼土の断ち割りなどの補足調査を行い、現場での作業の一切を終了した。以後平成5年3月31日まで、資料整理・報告書作成を実施した。

第1章 荻原遺跡の位置と調査の経過



第4図 調査区全体図

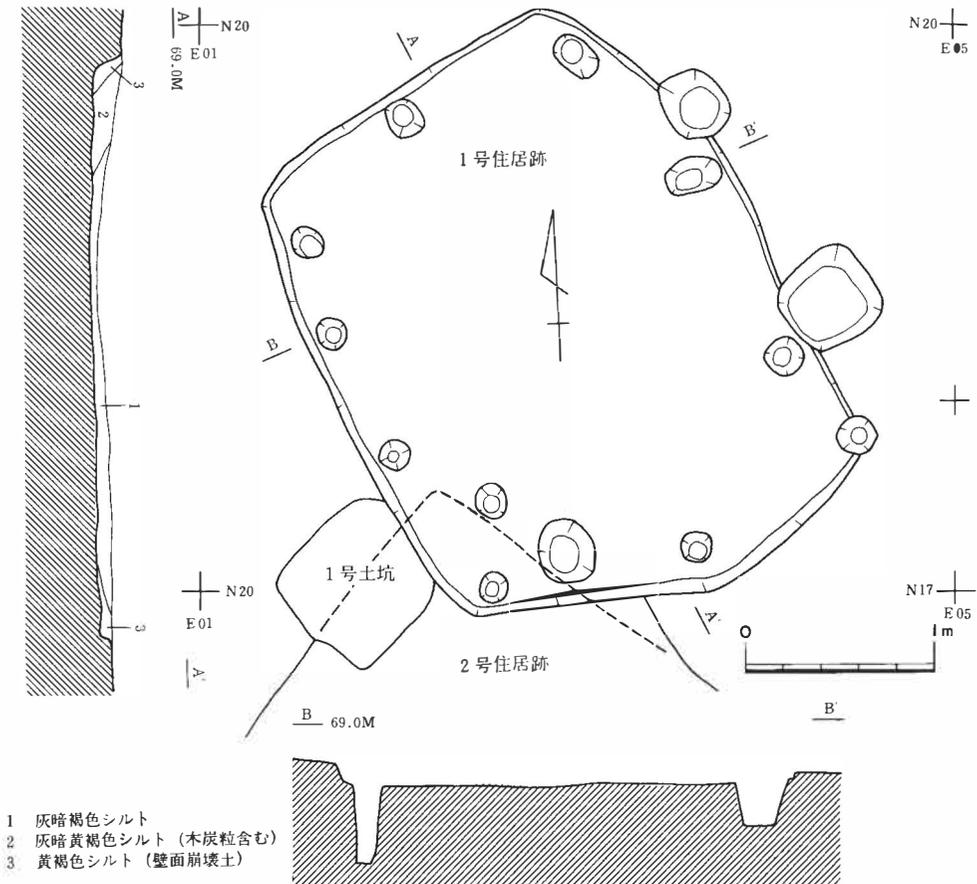
第2章 検出された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は、住居跡4軒、土坑10基、溝状遺構3基、焼土13ヶ所などである。それぞれの遺構と出土遺物について報告する。

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

1 第1号住居跡(第5・6図, 図版第三)

遺構の構造 調査区の北端で検出された住居跡である。Ⅲ層上面で検出した。住居の北東コーナー部が1号土坑・2号住居跡に切られている。ただし2号住居跡の床面が高く、壁面はほぼ全周が遺存している。



第5図 第1号住居跡

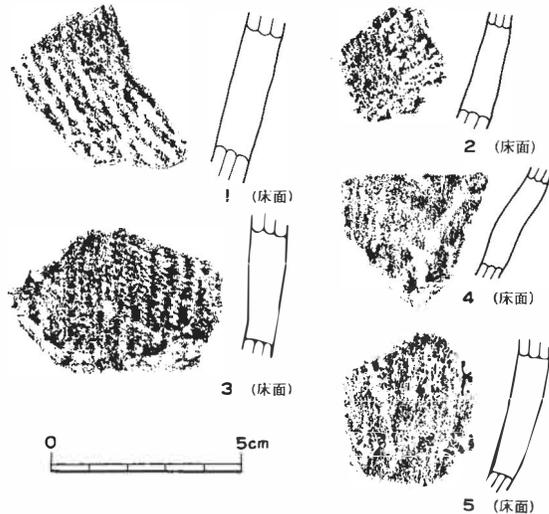
南辺が不整形であるが、長辺3.1m、短辺2.45mの、南北に長いほぼ長方形の住居跡である。壁面は西辺で15cmあるが、東辺では3cmほどが僅かに遺存している。床面は平坦で地山掘り方面を直接床面としている。中央部分は床面の硬化が顕著である。

壁面に沿って長辺に3間、短辺に2間の壁柱穴が検出されている。床面からの深さは40～20cmある。東辺の中央部の柱間は、1.04mと他の柱間より広く、出入り口に関連したものと考えられる。東辺の外側に隣接する2ヶ所のピットは、この住居跡を壊した後世のものである。

住居内の堆積土は遺存厚僅かであるが、褐色ないし黄褐色シルト層が自然に埋没した状況が観察された。

出土した遺物 堆積土および床面から土器破片が21片出土した。いずれも細片状の縄文土器破片である。床面から出土した破片5点を図示した。

第6図1・2は撚糸文を、3は0段多条のLR縄文を有している。5は底部付近の破片であるが、湾曲の状況から考えると、尖底土器になるらしい。



第6図 第1号住居跡出土遺物

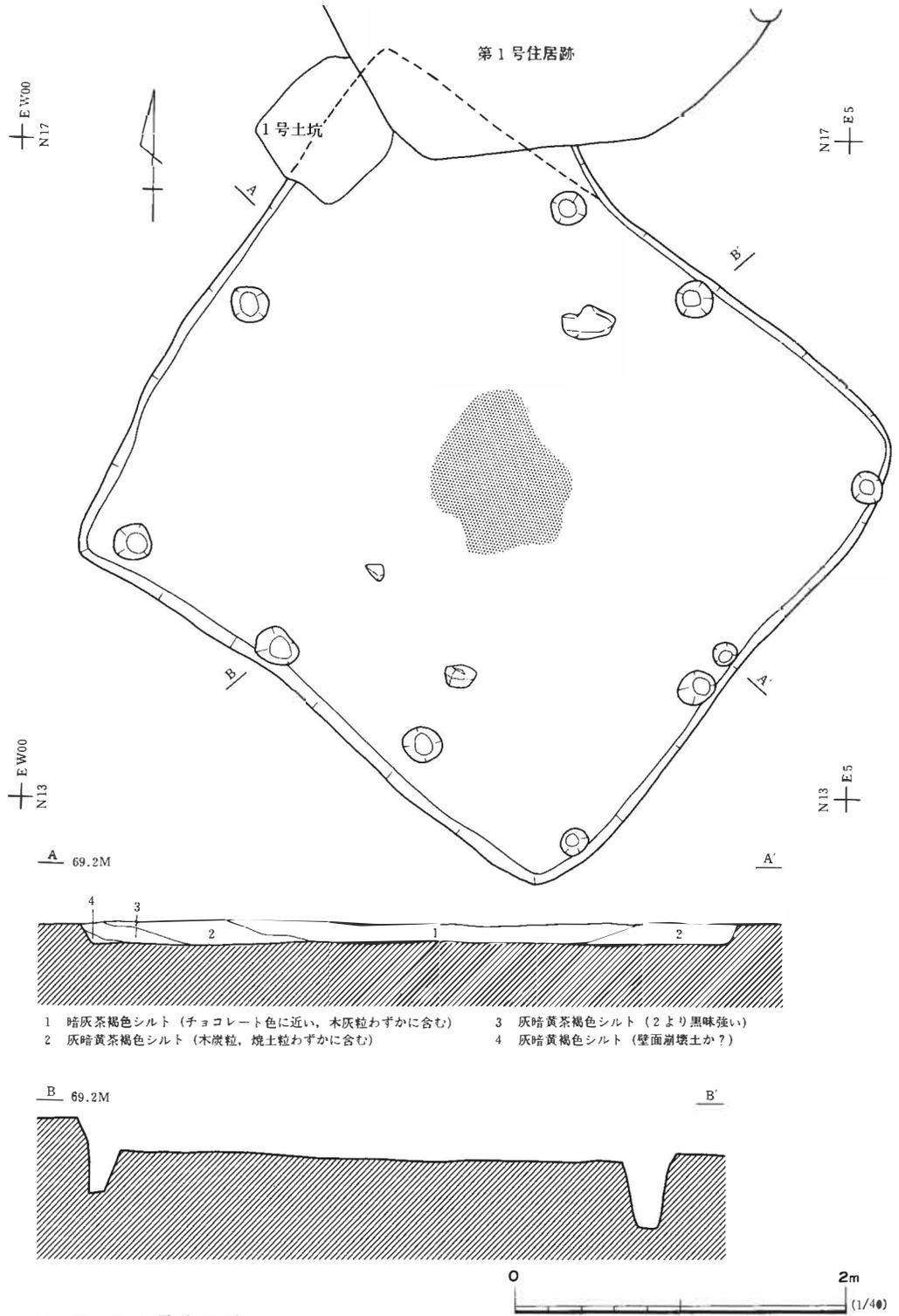
いずれも胎土に多くの繊維を含んでいて、縄文早期末葉の土器と考えられる。したがって、1号住居跡も早期末葉の遺構とするべきであろう。

2 第2号住居跡(第7・8図, 図版第三・四)

遺構の構造 1号住居跡の南に検出された住居跡である。北側のコーナー部の壁面が1号土坑に壊されたり、一部掘りすぎがあつて不明であるが、セクションベルトには、1号住居跡の住居内堆積土を切り込んだ壁面の立ち上がりが観察された。したがって、1号土坑よりは古く、1号住居跡よりは新しい遺構である。

長軸がNW-SE方向にあり、長辺3.95m、短辺3.60mの長方形の住居跡である。Ⅲ層で検出したが、検出面からの壁面の深さは20cm前後ある。床面は地山の掘り方面をそのまま床面としている。床面は硬化が顕著であり、中央部には直径1m弱の赤変硬化した焼土を伴っている。地床炉をもつ住居跡である。床面の3ヶ所に花崗岩が置かれている。炉の北側の石は長さが33cmある。表面が摩滅している点からみると、調理に用いられた置石と考えられる。

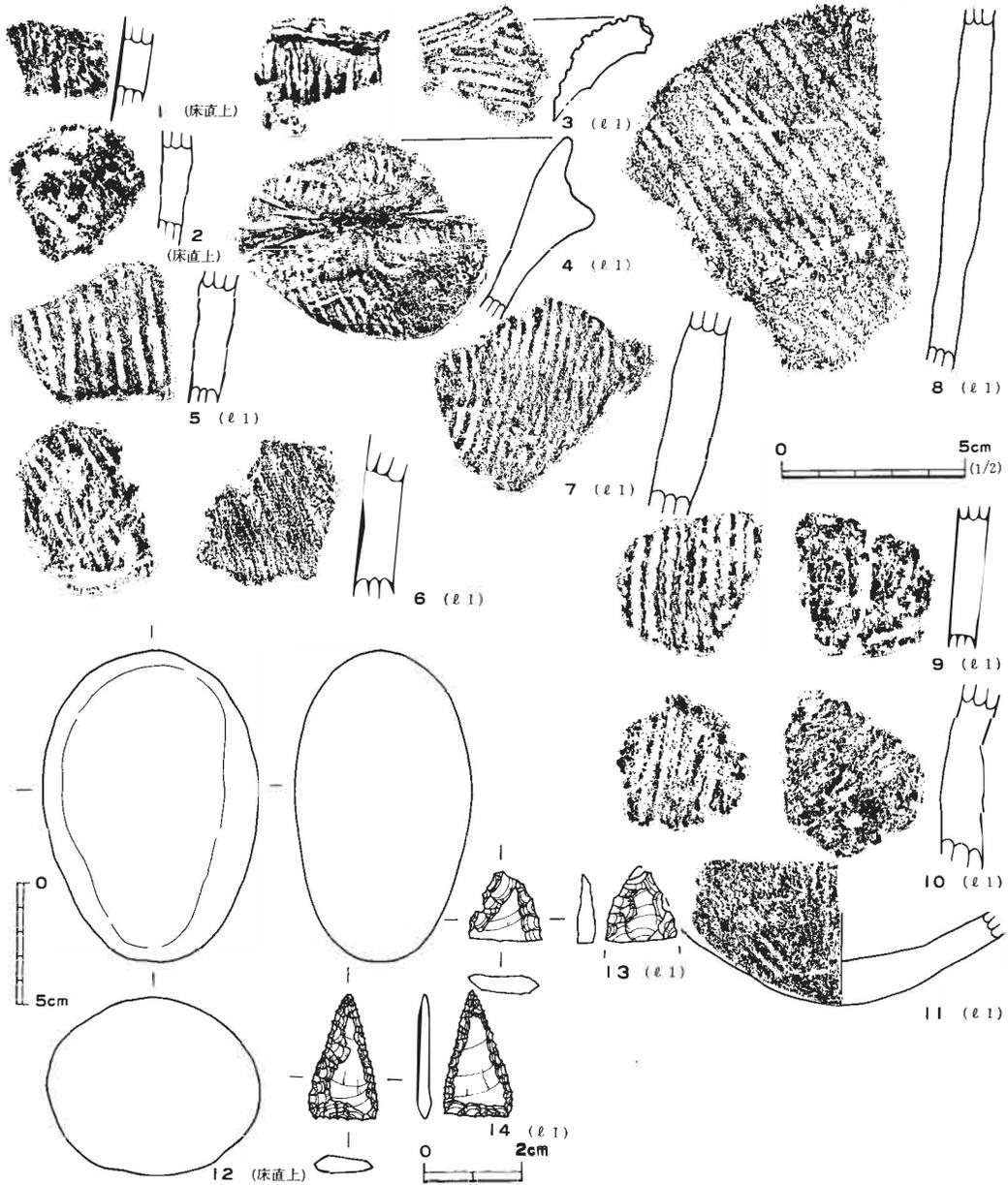
第1節 竪穴住居跡と出土遺物



第7図 第2号住居跡

壁面に沿って長辺には3間、短辺には2間の柱間になる柱穴が検出されている。直径25cm前後、深さは30～40cmである。住居内に4層の堆積土が観察された。1・2層は茶褐色シルト、壁際の3・4層は黄褐色シルト層であるが、自然埋没の様子を見せている。

出土した遺物 住居内堆積土1層から43片の土器破片、石鏃2点、磨石1点が出土した。このうち床面直上として取り上げた土器片が6片ある。第8図3～7、9～10は地文



第8図 第2号住居跡出土遺物

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

に撚糸文を有するものである。3は口唇部に半戴竹管による刺突文を施した後で、撚糸文を施文している。3・4・6は内面に条痕文が施文されている。8はRL縄文が施文されるが、縄文だけの破片は少ない。

13・14は石鏃である。13は流紋岩製の長さ1cmの残欠、14は硬質頁岩製の長さ1.7cmの完形品である。12は花崗岩の磨石で、長さ8.5cm、幅5.8cmある。

住居跡堆積土中から出土した土器破片は、素山2b式に比定できる。したがってこの住居跡は、縄文早期末葉の年代付けが可能である。

3 第3号住居跡(第9・10図, 図版第四)

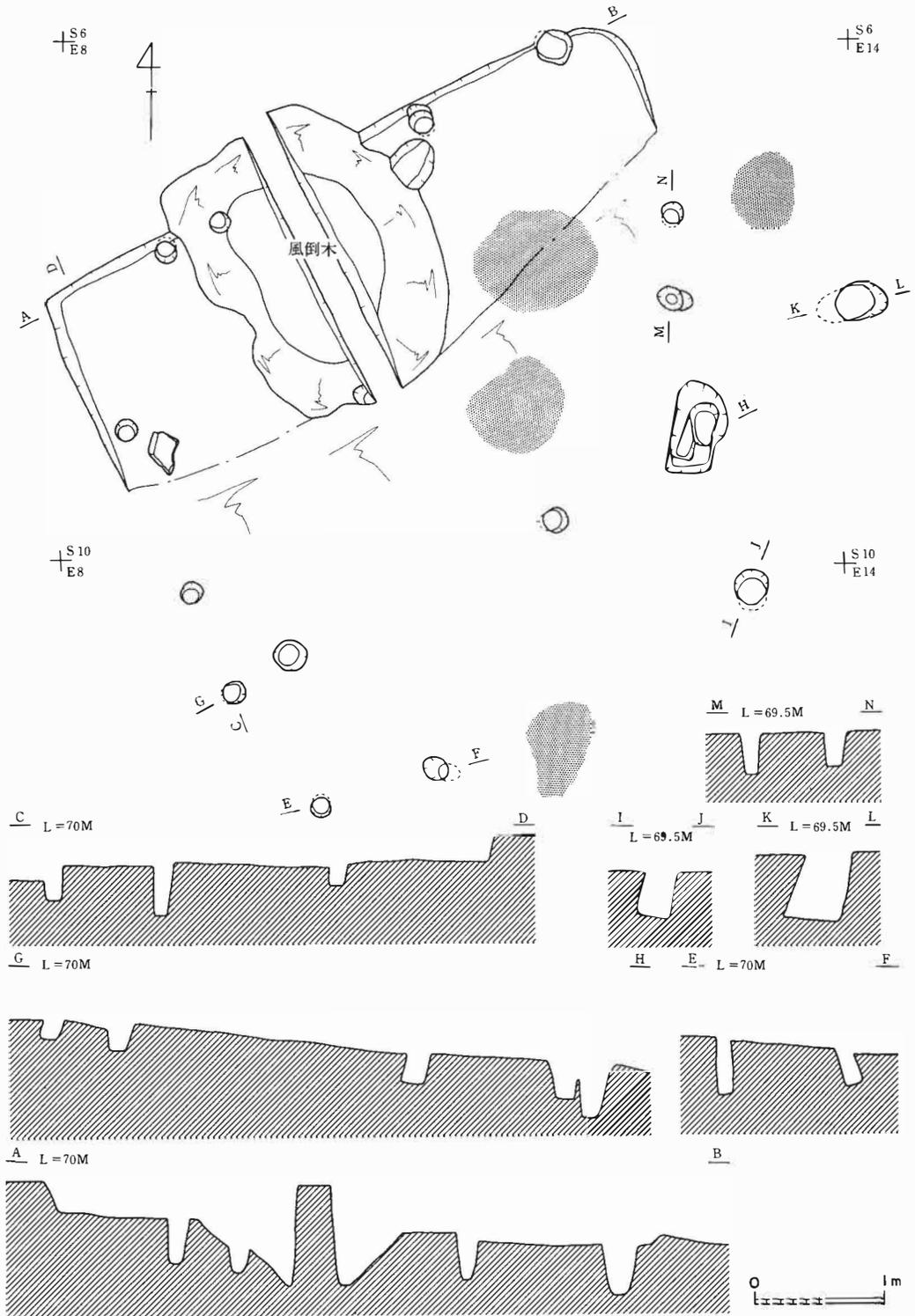
遺構の構造 調査区の南側斜面で検出されている。遺構の南側が削平され、さらに遺存部の中央を風倒木によって破壊されている。現存部は東西4.95m、南北1.8mあり、風倒木部を除き、比較的しっかりした床面が検出された。地山掘り方面を床面としている。

山側の北壁は20cmの深さが遺存している。北壁直下に4ヶ所、西壁に1ヶ所の柱穴があるほか、斜面の削平部に住居に伴った可能性のある柱穴がいくつかある。南端の柱穴で住居の南北規模を想定すると、4.5mほどになる。方形ないし長方形の住居跡であったことは間違いない。西壁際の床面に置かれた花崗岩は、上面を水平に据えられており、工作台や調理台として使われたものであろう。東側床面に、赤変硬化した焼土面が観察された。

出土した遺物 住居内堆積土1層から25片の縄文土器破片が出土した。第9図1～4は、条痕紋をもつものである。いずれも胎土に繊維を多量に含んでいる。1は外面に斜行する条痕文のほか、口唇部と内面上端にも条痕文が施文されている。2・4も内面に条痕文がある。5は縄文を地文とするが、内面に条痕がある。6は撚糸文である。尖底部破片が3点ある。25片の土器片は全て繊維土器である。

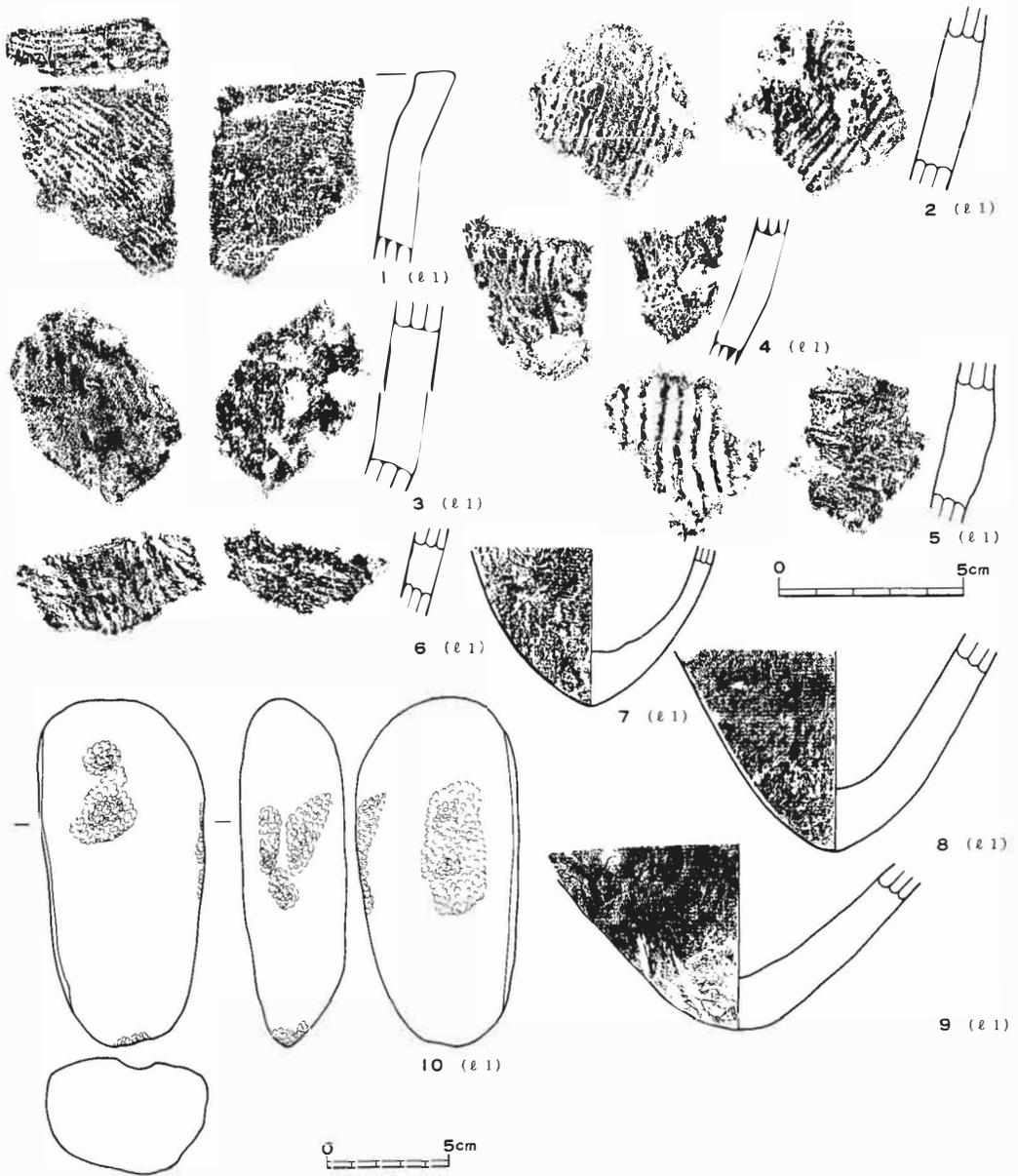
これらの土器片は、素山式ないし大畑G式としてとらえられる仲間であり、本住居跡の年代もこの時期、すなわち縄文早期末葉と考えるべきであろう。

第2章 検出された遺構と遺物



第9図 第3号住居跡

第1節 竪穴住居跡と出土遺物

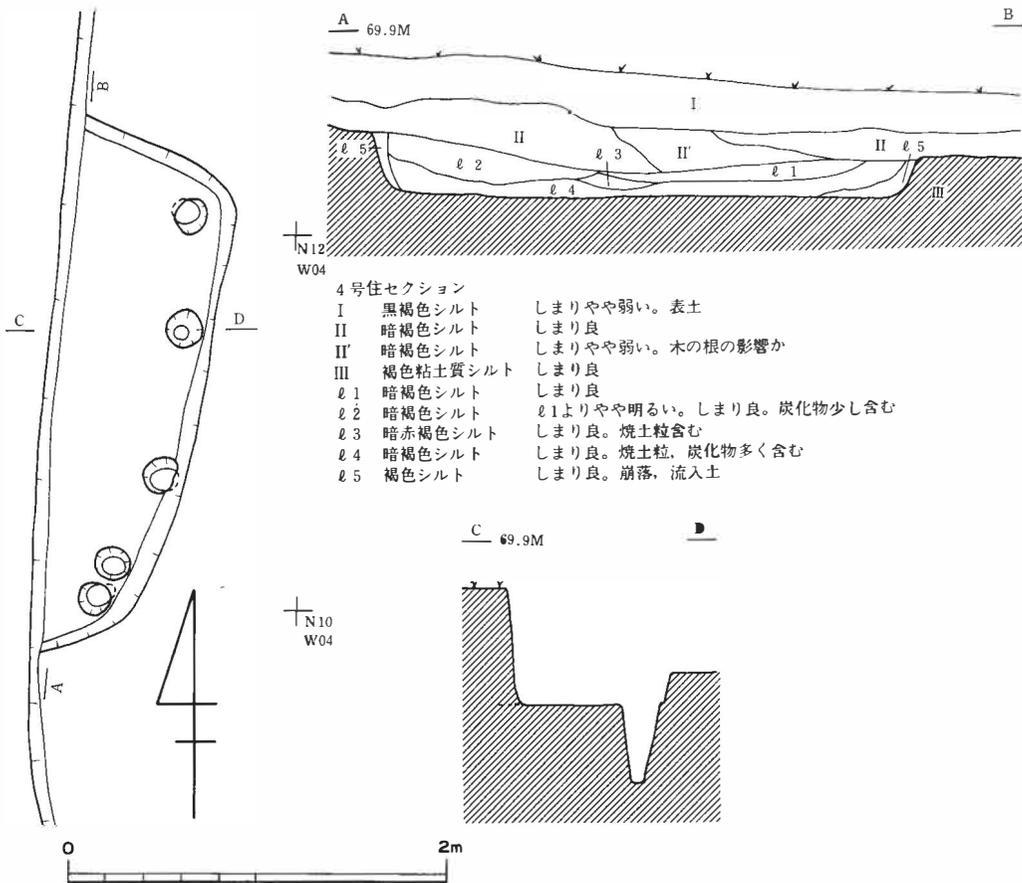


第10図 第3号住居跡出土遺物

4 第4号住居跡(第11・12図, 図版第五)

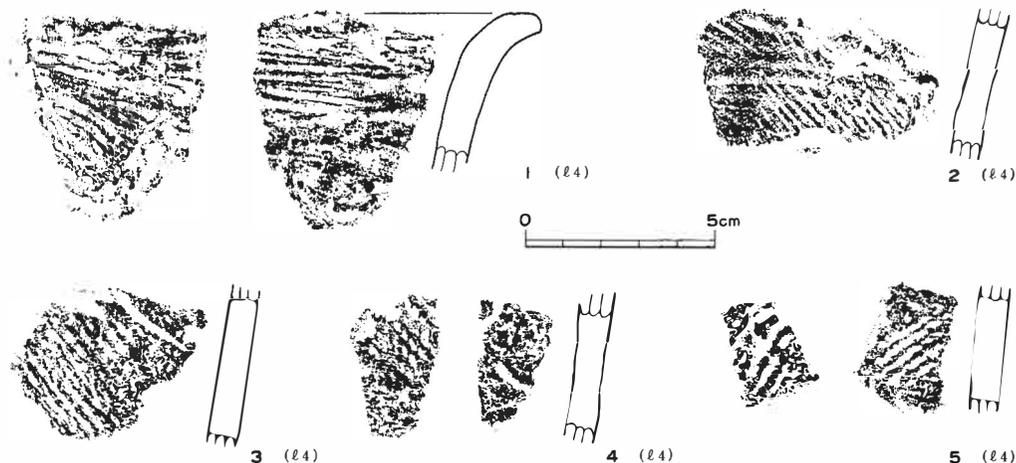
遺構の構造 調査区の西端で住居跡の東半部を検出し、検出部分だけを調査した。検出面はⅢ層上面である。現存部で南北2.8m、東西0.8mを測るが、一辺3m前後の方形ないし長方形の平面プランと想定される。検出面から床面までの深さは30cmある。自然に埋没したものと考えられるが、床面を直接覆う4層は、下部に焼土と木炭を多量に含んでおり、火災に遭った住居跡らしい。東壁に沿って、深さ40cm前後の柱穴が5ヶ所確認されている。

出土した遺物 4層の床面直上から11片の縄文土器破片が出土している。第12図1・2・5は内外面に条痕文が施文される土器である。3・4は撚糸文の土器である。出土した全ての破片に多量の繊維が混入されている。これらの破片は、素山式ないし大畑G式の範疇でとらえられる仲間であり、遺構の年代もこの時期縄文早期末葉とすることができる。



第11図 第4号住居跡

第2節 土坑と出土遺物



第12図 第4号住居跡出土遺物

第2節 土坑と出土遺物

今回の調査では10基の土坑が検出・調査されている。このうち、2・7・8号土坑は形態・堆積土・出土遺物などから、縄文時代の遺構と考えられる。これ以外の7基の土坑はいずれも木炭・焼土を伴うという共通性があり、しかも遺物が伴出せず年代が不明な遺構である。

1 縄文時代の土坑(第13・14図, 図版第六・七)

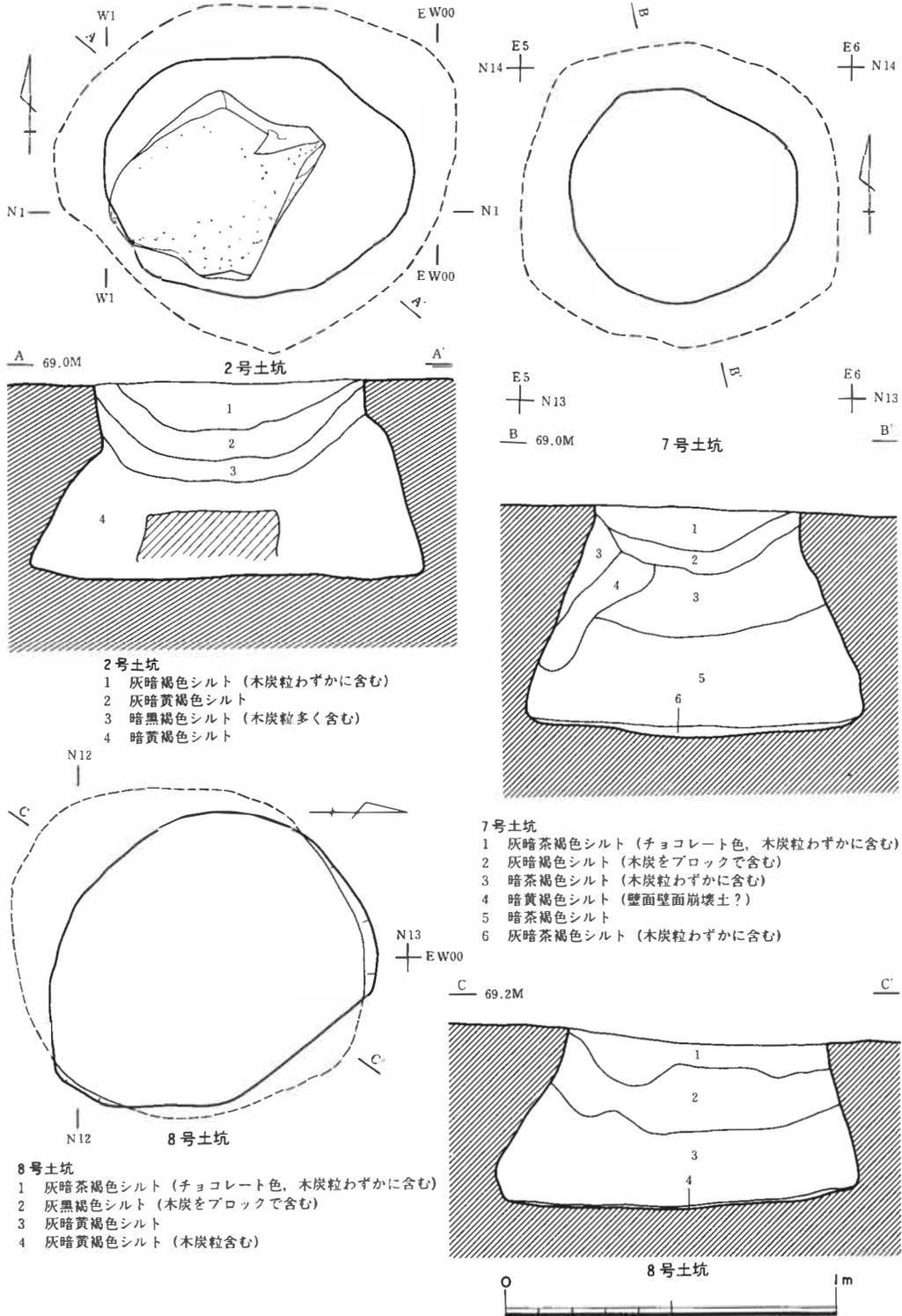
2号土坑 2号住居跡の西側で検出された、フラスコ状の土坑である。開口部は東西90cm, 南北72cmの楕円形であるが、底面は東西1.22m, 南北1.05mある。底面までの深さは60cmある。底面中央のやや西寄りに長さ70cm, 幅51cm, 厚さ18cmの花崗岩があるが、底面にのっけていて、また下部に河原石4個をはめこんで、上面を水平に据えている。人為的な石と考えざるを得ない。自然に埋没したようである。

2層から縄文土器破片3片と磨製石斧1点, 剥片2点が, 4層から剥片が4片出土している。第13図1～3は胎土に多量の繊維を含む, 撚糸文の施文された土器である。縄文早期末葉と考えられる。4は磨製石斧の刃部側の残欠である。残存長5.6cm。蛇紋岩製で, 片面に自然面を残している。

7号土坑 2号住居跡の東側で検出された。開口部65cm前後のほぼ円形を呈すが、底面は東西95cm, 南北92cmの角ばった円形のフラスコ形土坑である。堆積状況は自然の埋没を示している。検出面からの深さは68cmを測った。

5層から縄文土器破片2点, 剥片1点が出土した。第14図5・6は外面に撚糸文を, 内面に条痕文をもつ繊維土器である。縄文早期末葉の土器である。

第2章 検出された遺構と遺物



第13図 第2・7・8号土坑

第2節 土坑と出土遺物

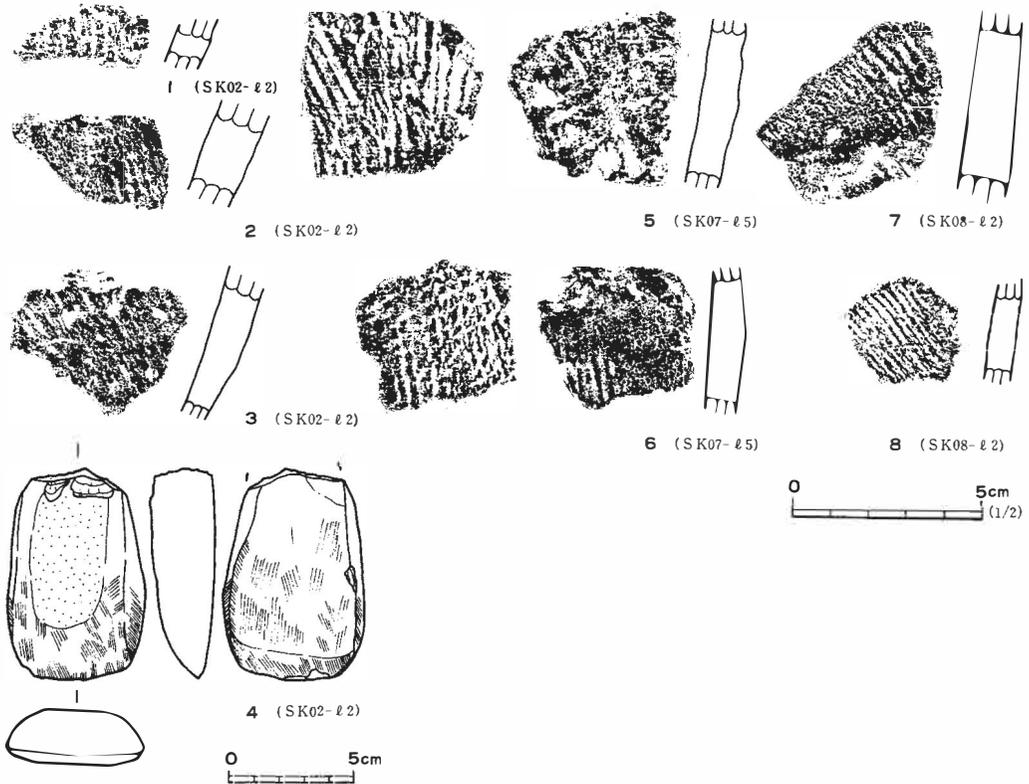
8号土坑 2号土坑の南西部部に検出されたフラスコ形土坑である。開口部が調査中に一部崩壊し楕円形を呈するが、検出時には直径80cm前後の円形を呈していた。現存部は東西1m、南北80cmの楕円形である。底面は東西1.05m、南北1.10mのほぼ円形をしている。底面までの深さは53cmある。褐色ないし黄褐色シルトが自然埋没していた。底面直上の4層には、木炭粒が多く含まれている。

2層から2片の縄文土器破片と割れた花崗岩自然石1個が出土した。第14図7・8は、撚糸文が施文された土器片である。いずれも胎土に多くの繊維を含んでいる。縄文早期末葉の土器片と考える。

2 時期が不明な土坑(第15図, 図版第八)

1号土坑 長辺78cm, 短辺73cmのほぼ方形の土坑である。遺存部の深さ12cm。底面直上に焼土を含む木炭層がある。壁面の一部が加熱を受け、赤変硬化している。自然の埋没と考えられる。遺物なし。

3号土坑 長辺1.05m, 短辺85cmの長方形の土坑である。底面は緩く窪んでおり、検



第14図 第2・7・8号土坑出土遺物

出面からの深さは25cmある。底面直上に焼土を含む木炭層がある。壁面の一部が赤変硬化している。自然に埋まっている。遺物は出土しなかった。

4号土坑 大半を現県道の法面によって破壊され、西側の壁面が僅かに遺存しているだけである。残存部は東西34cm、南北85cmある。長辺1m前後の土坑であったものと思われる。最下層に木炭を含む堆積土があり、壁面の一部が赤変硬化している。残存部の深さは16cmであった。自然埋没。遺物なし。

5号土坑 長辺1.15m、短辺92cmの長方形の土坑である。検出面からの深さは20cmあった。3層は焼土を含んだ木炭混じりの層である。壁面のほか、底面の一部も加熱を受けて赤変硬化している。遺物出土せず。自然に埋没している。

6号土坑 長径1.8m、短径1.55mの不正な円形を呈す土坑である。壁面の立ち上がりは緩やかであるが、底面には径1m前後の平坦面がある。検出面から底面までの深さは35cmある。底面を覆う5層は木炭を多く含むが、壁面はほとんど焼土化していない。自然に埋没したようである。遺物は出土しなかった。

9号土坑 長辺1.58m、短辺87cmの長方形の土坑である。角がきっちりと形成され、壁面の立ち上がりも垂直である。底面は緩い窪みが観察される。壁面は四辺ともに強い加熱を受け、赤変硬化が顕著である。しかし底面はほとんど焼土化していない。堆積層の間層である3層と、底面を覆う5層に多量の木炭がそのまま出土した。上位層は自然に堆積したものと考えられる。遺物は出土しなかった。

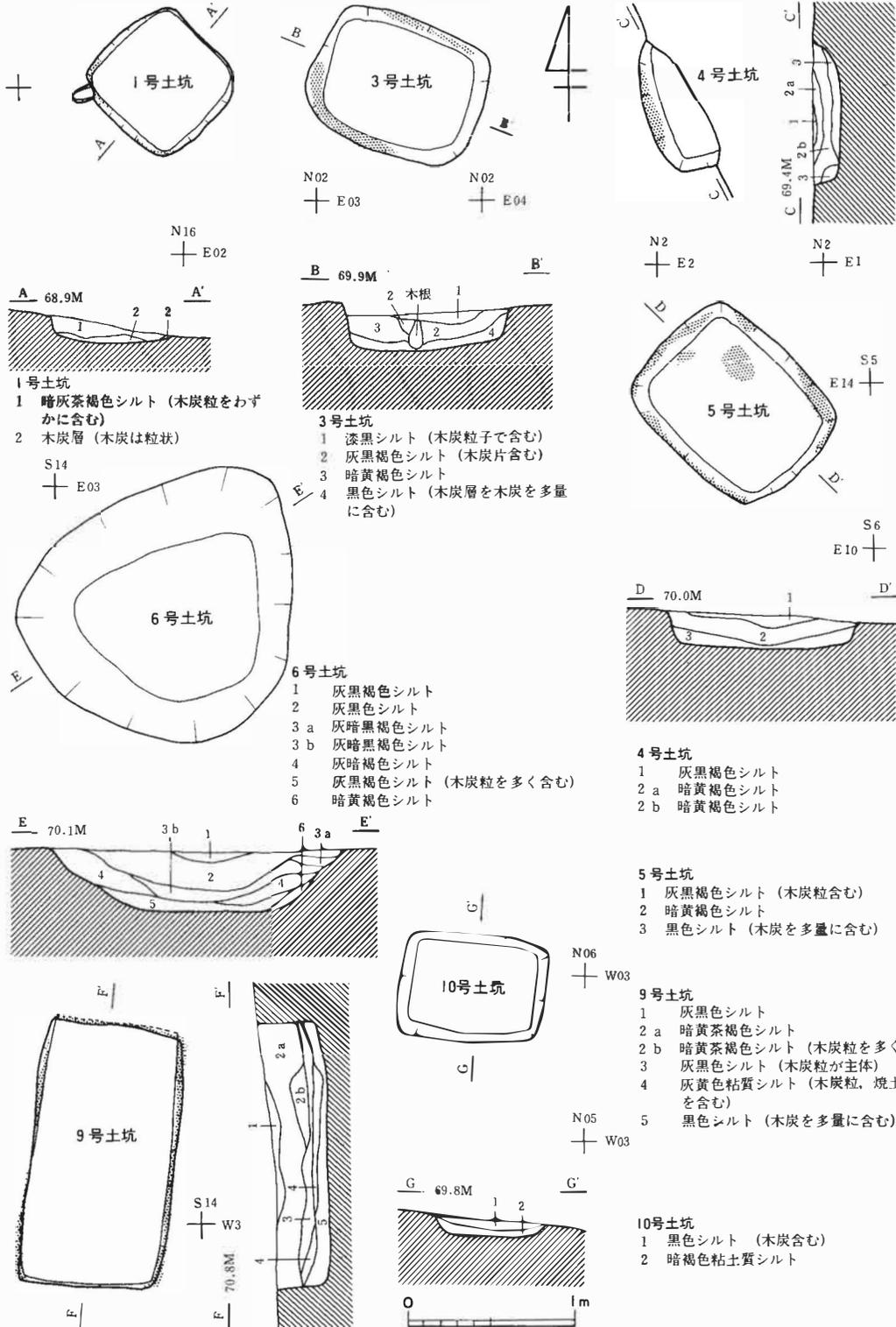
10号土坑 長辺87cm、短辺67cmの長方形の土坑である。深さ10cm。堆積土最下層に木炭を含む層があるが、壁面はほとんど焼土化していない。遺物なし。

第3節 その他の遺構と出土遺物

1 焼土跡(第4図、図版第六)

調査区内の住居跡の外側に、13ヶ所の焼土跡が検出されている。このうち南側斜面の8～13号焼土はⅣ層面での焼土跡であり、上位面は削平されている。

1～7号焼土はⅢ層上位面で検出された。この層準は住居跡など、縄文時代早期末葉の遺構検出面にあたる。したがって、これらの焼土はこの時代の屋外炉である可能性が強いものである。1～4号焼土は、南北に並んだ焼土跡であるが、このうち1・2号焼土は赤変硬化が顕著であり、焼土の厚さも20cmをこえるものである。2号焼土は長さが2.2mあるが、焼土の断面を観察すると、何ヶ所か焼土が薄くなる場所がある。たぶんある程度の期間の中で、ほぼ同一地点で焚火が繰り返され、その結果焼土が連続したものと考えられる。2号焼土の東1mの地点には、Ⅲ層上面に置かれた長さ50cm、幅45cmの花崗岩が検



第15図 第1・3・4・5・9・10号土坑

出されているが、この花崗岩は上面を水平に据え置かれ、また上面の一部には石皿状の窪みが形成されるほど、摩滅が顕著であった。集落内の広場の中の、共同の調理に関わった焚火の跡が焼土となって依存したものであろう。周辺から出土した土器片は、遺物包含層出土の遺物として取り扱った。

2 溝状遺構

調査区内に、溝状の遺構が3ヶ所確認されている。1号溝は、1号住居跡の西側で検出された。ほぼ東西に、長さ4.9m分を調査した。幅1.5m、深さ85cmあった。底面は凹凸が激しい。遺物もなく、年代も不明である。

2号溝は、3号土坑東側に検出されている。「く」の字に折れ曲がる、幅20cm、深さ10cm、全長4.2mの溝であるが、4号焼土を切っている。遺物は出土しなかった。

3号溝は調査区の南東端に検出されている。上幅1m、深さ35cmで、断面はU字状をしている。長さ3.5mを調査しただけである。遺物もなく、年代が不明である。

第4節 遺物包含層と出土遺物

1 包含層の分布

遺物包含層としたのは、基本層位Ⅱ層である。この層は調査区の南側の最高位部を境として、北側斜面のほぼ全面に薄く分布していた。最も厚いところで10cm前後である。縄文時代の遺構検出面であるⅢ層上面を直接覆っているので、縄文時代早期末葉の生活面が、この層の中にあつたものと考えられる。南斜面は削平されたか、自然流出したらしい。

2 縄文土器

290片程度の縄文土器破片が出土している。いずれも細片であり、型式的特徴がわかるものは少ない。次のように分類できる。

I群土器 斜行する沈線文によって文様が描かれる土器で、第16図1の1点だけ出土している。部分的に斜格子文が観察される。縄文早期田戸下層式に比定される。

Ⅱ群土器 胎土に繊維を含む、縄文早期末葉の土器である。I群土器の1点以外は全て本群土器と考えられる。施文文様の特徴から次の6類に細分される。

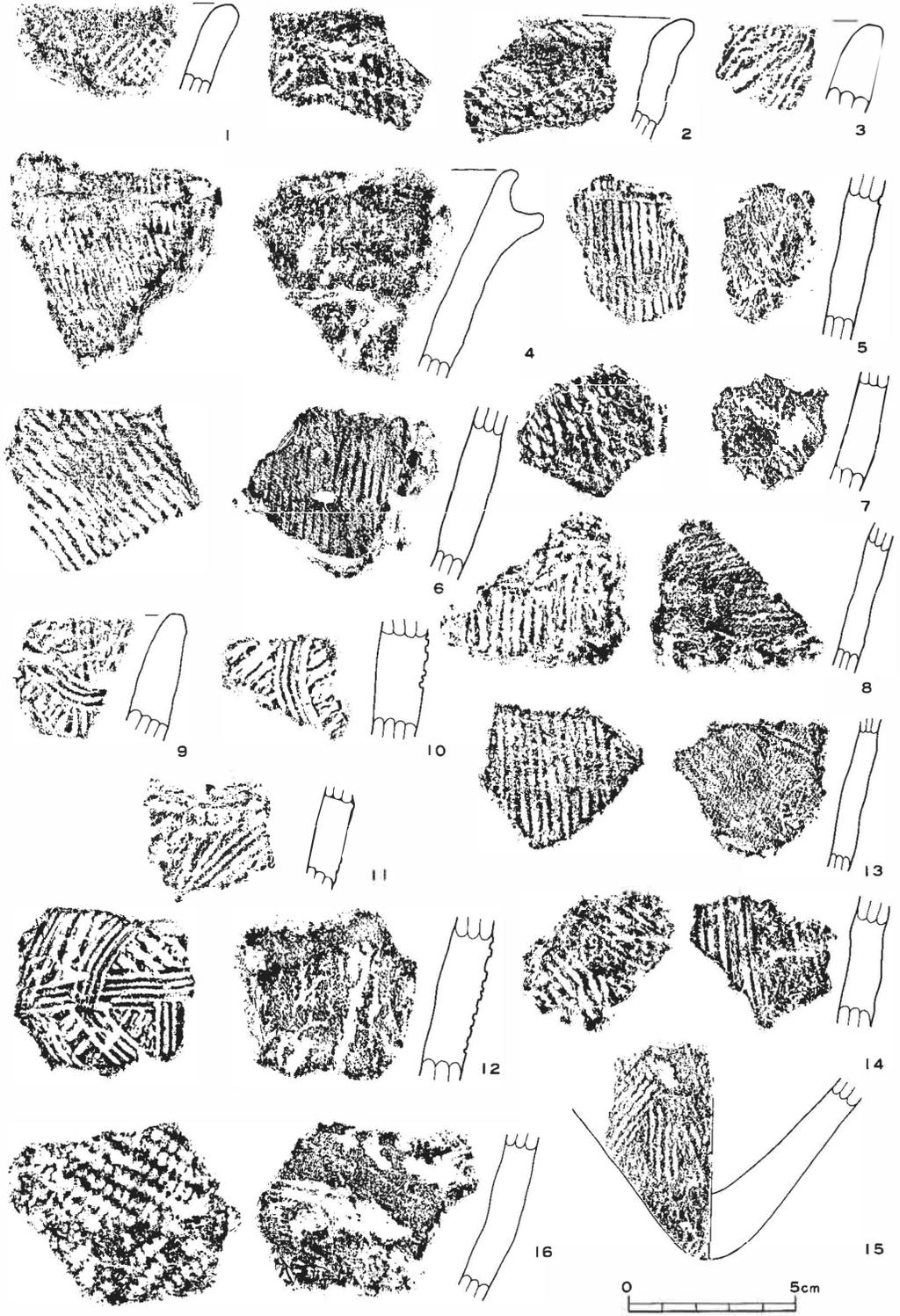
1類 内外面に条痕文が施文される土器である。12点の破片を数えるにすぎない。

2類 外面に縄文、内面に条痕文をもつ土器である。10片程度出土している。

3類 外面に撚糸文、内面に条痕文をもつ土器である。25片程度出土している。この仲間には、第16図4のように口縁直下に高く突出した段が巡るものが1個体ある。

4類 外面に縄文が施文される土器である。内面には擦痕が観察されるものがある。60片程度であり、20%ぐらいの割合を占める。

第4節 遺物包含層と出土遺物



第16図 遺物包含層出土遺物(1)

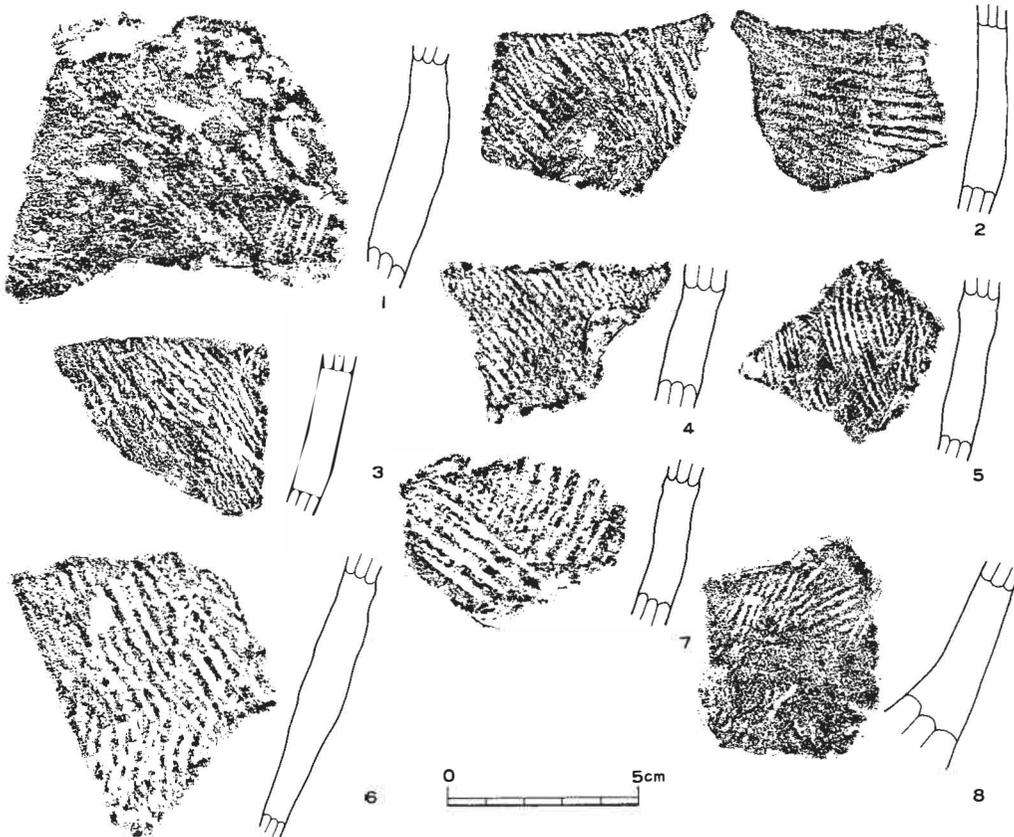
5類 地文に撚糸文の上に、多条工具により文様が描かれるもの。第16図9～12は本類の同一個体の破片と思われる。

6類 外面に撚糸文が施文される土器である。撚糸文は口縁部に近い破片では縦方向に施文されるものが大半であるが、体部下半の破片と思われるものには、条が交差するものが多い。本群土器のなかでは最も出土量が多く、180片、約60%を占めている。

以上の第Ⅱ群土器は、1類は素山2a式に、2類は素山2b式、5類と6類の大半は大畑G式に比定されるものとする。3類は、突出した段をもつという点では素山2a式ないし素山2b式的であるが、地文が撚糸文である点に後出的な要素を感じる。4類は口縁部破片がなく、素山2b式と大畑G式の両者を含むものと考えられる。

3 石 器

石斧8点、石匙1点、凹石・敲石5点が出土している。第18図1・6は片面に自然面を残した打製石斧である。1は刃部に局部的な研磨が加えられている。2は片面の一部に研



第17図 遺物包含層出土遺物(2)

第4節 遺物包含層と出土遺物

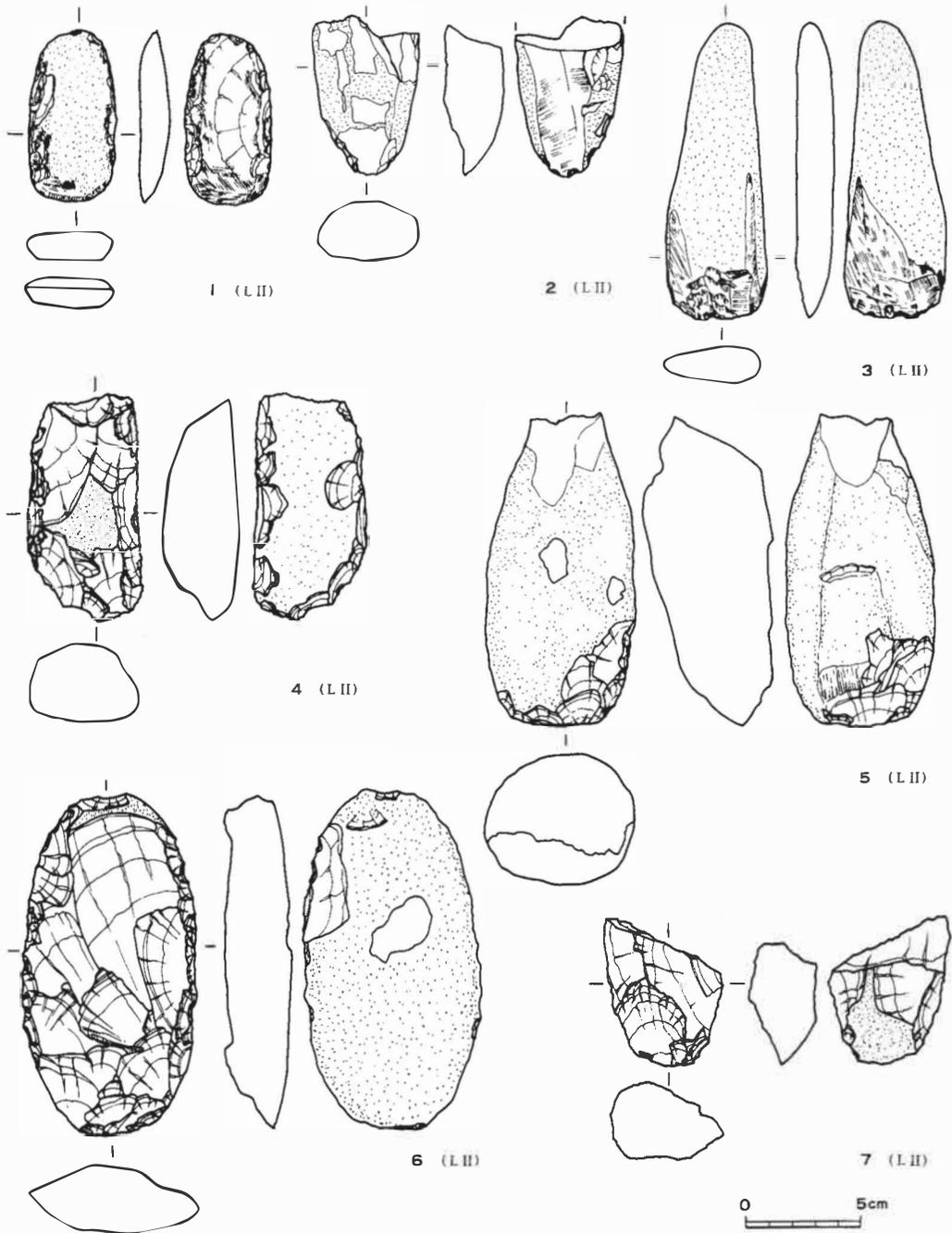
磨を加えた石斧の残欠であろう。3は自然石の先端部を研磨した、局部磨製石斧である。片面に研磨する以前の打裂痕がある。5は自然石の先端部を打裂しただけの、局部打製石斧と呼んでおく。4・7は打製石斧の残欠と考えるが、自然面が残されている。第19図7も、自然石の先端部に片面だけ研磨を加えた、片刃の局部磨製石斧である。

第19図1～5は円礫を用いた磨石・凹石である。1・4・5は中心に凹部があり、周辺には磨痕と敲打痕がある。2には磨痕は認められない。3は側面の一部に敲打痕がある。

第19図6は縦形石匙で、背面に入念な押圧剥離が加えられている。

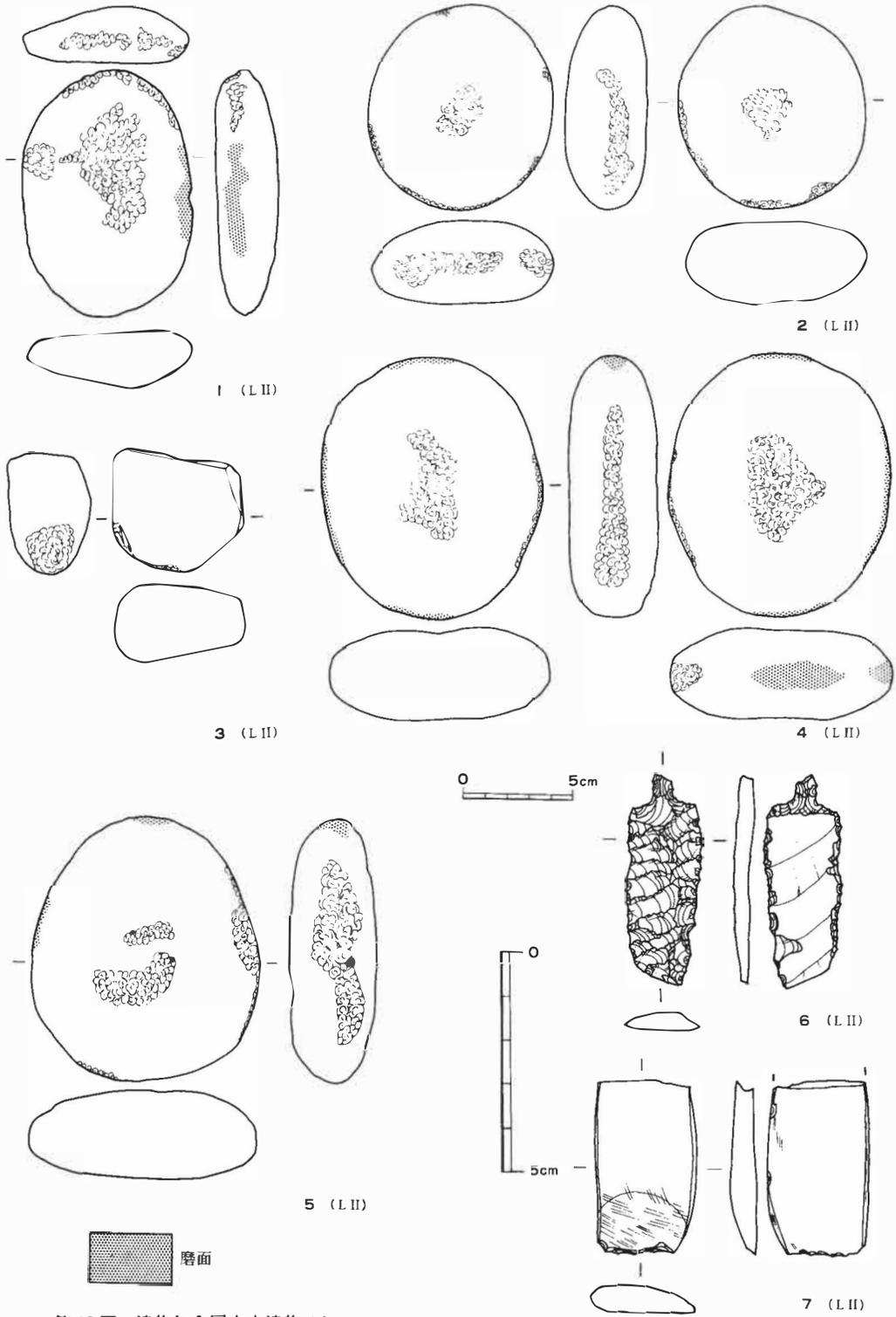
第1表 遺物包含層出土石器一覧

図番号	名称	大きさ (cm)			石質	備考
		長さ	幅	厚さ		
第18図	1	打製石斧	7.3	3.8	1.2	局部磨製
	2	打製石斧	6.8	4.5	2.5	局部磨製
	3	磨製石斧	12.5	4.2	1.6	局部磨製
	4	打製石斧	9.5	4.7	3.1	破片
	5	打製石斧	13.2	6.1	5.4	局部打製
	6	打製石斧	14.4	7.5	2.6	
	7	打製石斧	6.7	4.6	3.0	破片
第18図	1	凹石	10.6	7.6	2.7	磨面あり
	2	凹石	8.9	8.0	3.6	
	3	敲石	4.6	5.6	3.3	
	4	凹石	11.5	9.7	4.0	磨面あり
	5	凹石	11.4	10.0	4.0	磨面あり
	6	石匙	4.7	1.6	0.4	
	7	磨製石斧	3.9	2.2	0.6	局部磨製・破片



第18図 遺物包含層出土遺物(3)

第4節 遺物包含層と出土遺物



第19図 遺物包含層出土遺物(4)

第3章 調査のまとめ

荻原遺跡の発掘調査は、県道拡幅部分に限定した約500㎡の小さな調査であった。したがって、この遺跡の詳細な内容は明らかにできないが、今回の調査で知ることのできた成果についてまとめておく。

1 縄文時代の集落

縄文時代の遺構は竪穴住居跡4軒、土坑3基、焼土跡13ヶ所であった。これらの遺構の大半は、Ⅲ層上位面で検出されていることや、伴出する土器がⅡ群土器であるという点などから考えると、年代的には縄文早期末葉の遺構と考えてよさそうである。もっとも1・2号住居は、重複した位置関係にあり同時に存在したとは考えられないが、調査で得られた土器資料が、素山2a式～大畑G式という限定された土器形式であり、その時間幅はこれらの中でおさえることができる。

同時に存在したとはいえないものの、検出された住居跡は焼土跡群をはさんで、南北に対峙したような配置にある。丘陵の東側は過去に県道敷地として削平されているが、この部分にも1、2軒の住居跡があった可能性は高い。とすれば、この遺跡における縄文時代早期末葉の集落のありかたは、焼土跡群を中央の広場とした小規模な環状集落であったとみるのが妥当な見方とはいえないか。2号焼土の東に置かれた花崗岩平石は、調理に関わった痕跡が認められた。小規模な集落ではあったが、中央の焼土跡群は、ムラ人たちの協同生活の場であった。1・2号住居の周辺で検出された3基の土坑は、いずれも小規模ではあるが、いわゆるフラスコ状土坑であった。多くの事例のように貯蔵穴と考えることに異論はあるまい。

近年福島県浜通り地方では、縄文早期末葉から前期初頭にかけての集落跡の調査が行なわれている。荻原遺跡の北方1km足らずに位置する原町市八重米坂A遺跡や、相馬市段ノ原B遺跡・山田B遺跡などであるが、これらの遺跡では100軒をこえるほどの住居跡が、足の踏場もないほどに検出されている。こうした大規模な集落遺跡とは、対照的なありかたをしているのが荻原遺跡であり、集落研究に多くの問題を提起する成果であったといえよう。

出土した遺物の中で、石器の製作技術にも特色があった。種類・量は集落の規模を反映したありかたをしていると考えるが、石斧には磨製・打製にかかわらず、自然石の一部に加工しただけのものや、自然面を大きく残したものが目につく点を指摘しておきたい。

2 縄文時代以外の遺構

時期が不明な土坑として報告した、方形ないし長方形の土坑について触れておきたい。この種の土坑は7基検出されたが、これらには壁面が焼けていること、底面直上に木炭層が残されることの他に、堆積土が自然に埋没したという共通点がある。

類例は相馬市善光寺遺跡・新地町境A遺跡などにあり、調査者は骨片を伴うものがあるということで火葬のピットとし、年代的には平安時代初め頃と考えている。火葬にしては焼土の程度が弱いなどの疑念もあるが、荻原遺跡のこの種土坑については、これらの見解にしたがっておこうと思う。

圖 版



1 荻原遺跡の遠景(北から)



1 荻原遺跡の近景(北から)



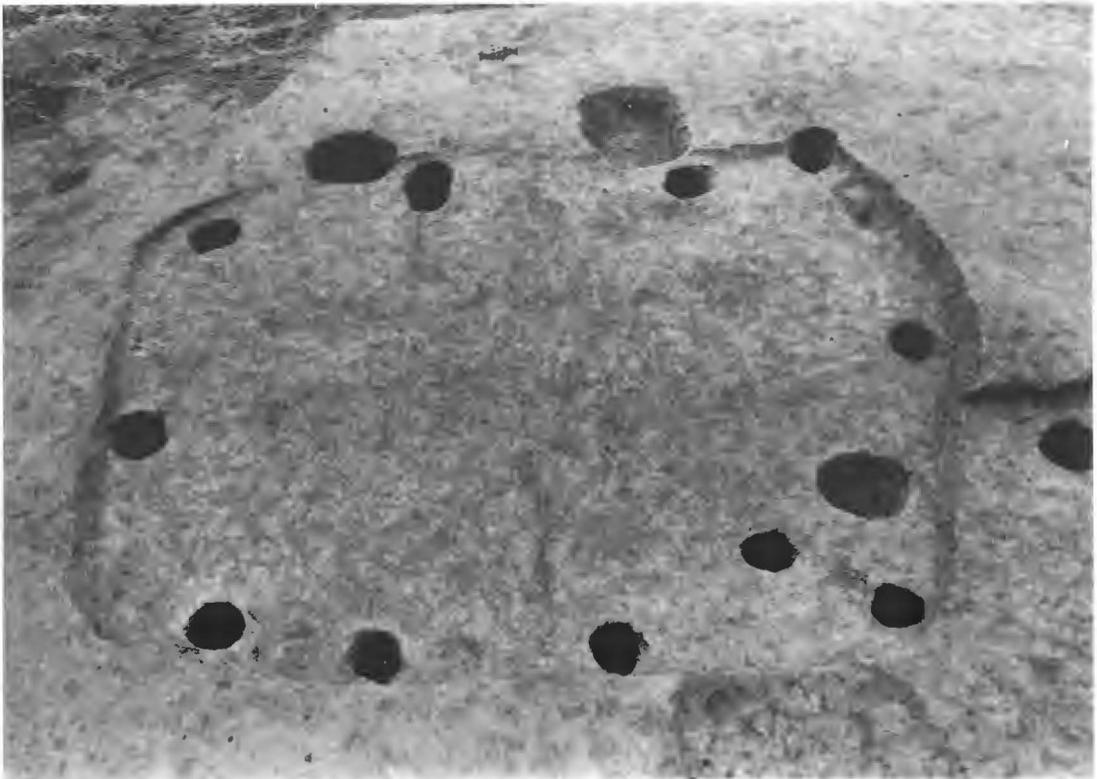
1 調査区全景（北から）



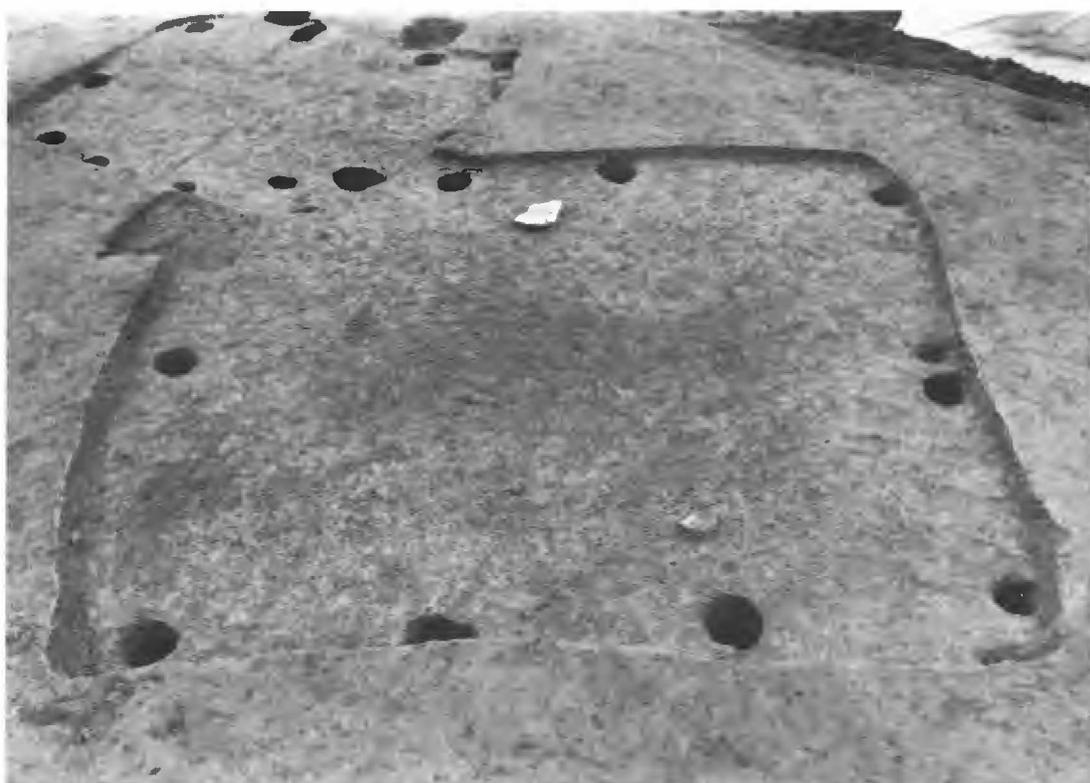
2 調査区中央部の状況（北から）



1 第1・2号住居跡の重複状況(北から)



2 第1号住居跡(西から)



1 第2号住居跡(西から)



2 第3号住居跡(南から)



1 第4号住居跡(北から)



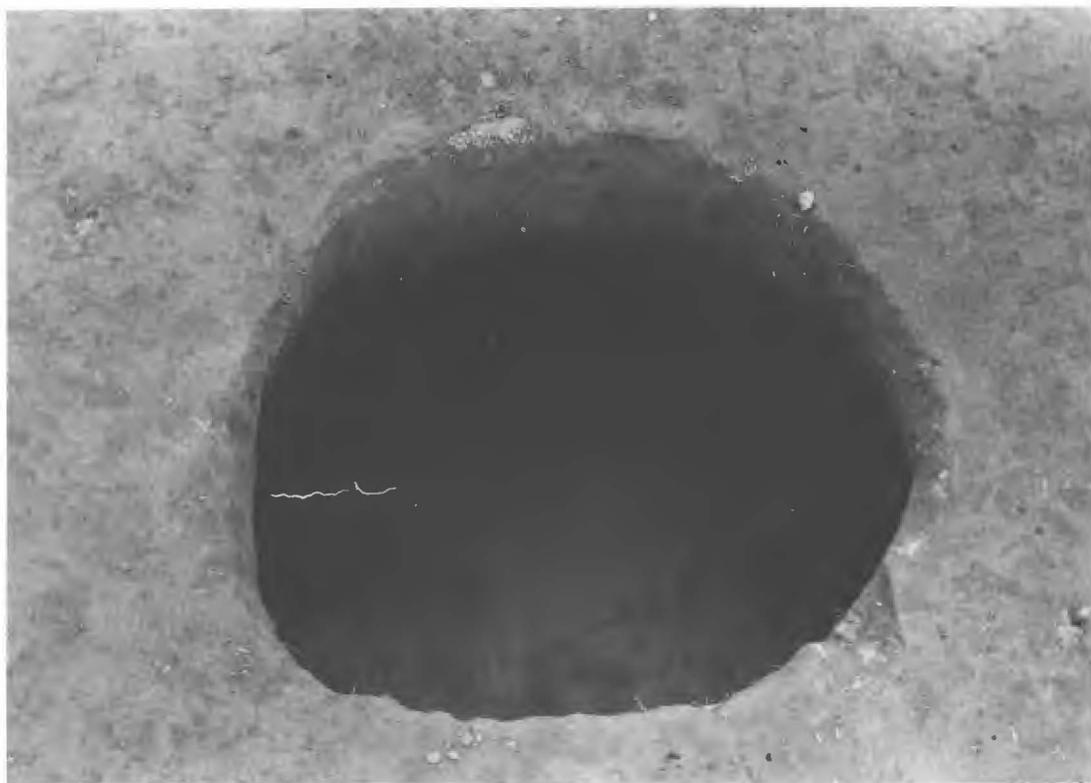
2 第4号住居跡と堆積状況(東から)



1 第1・2号焼土跡と台石(東から)



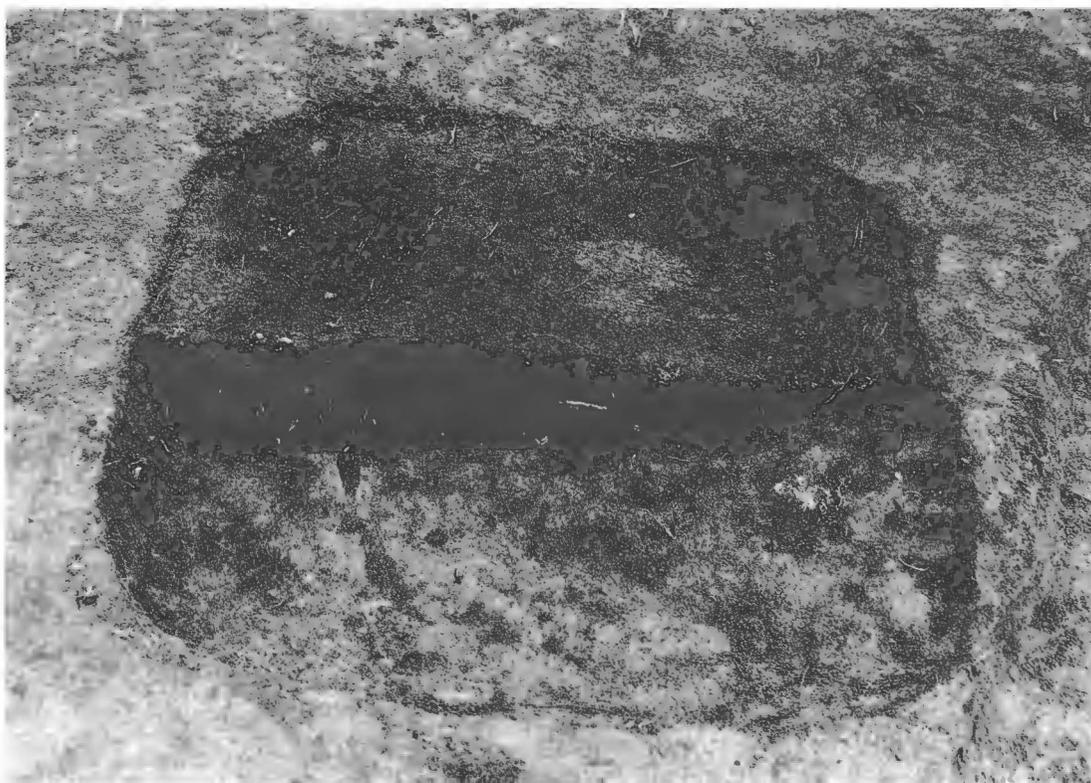
2 第2号土坑(北から)



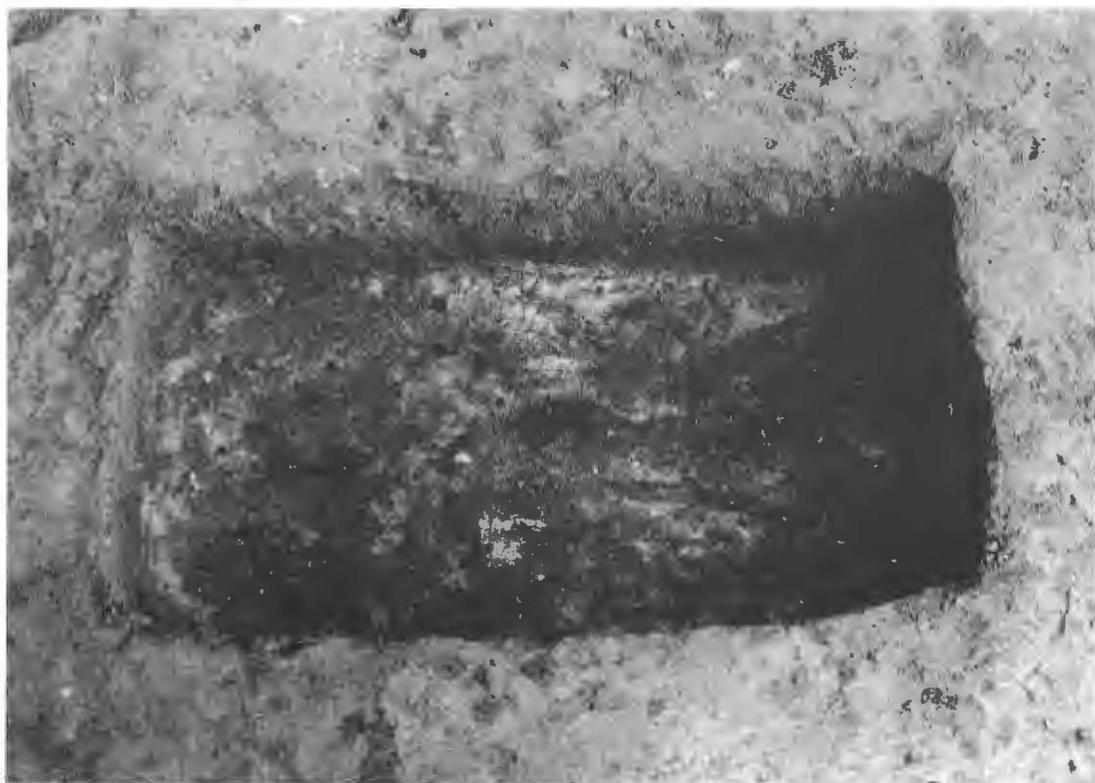
1 第7号土坑(南から)



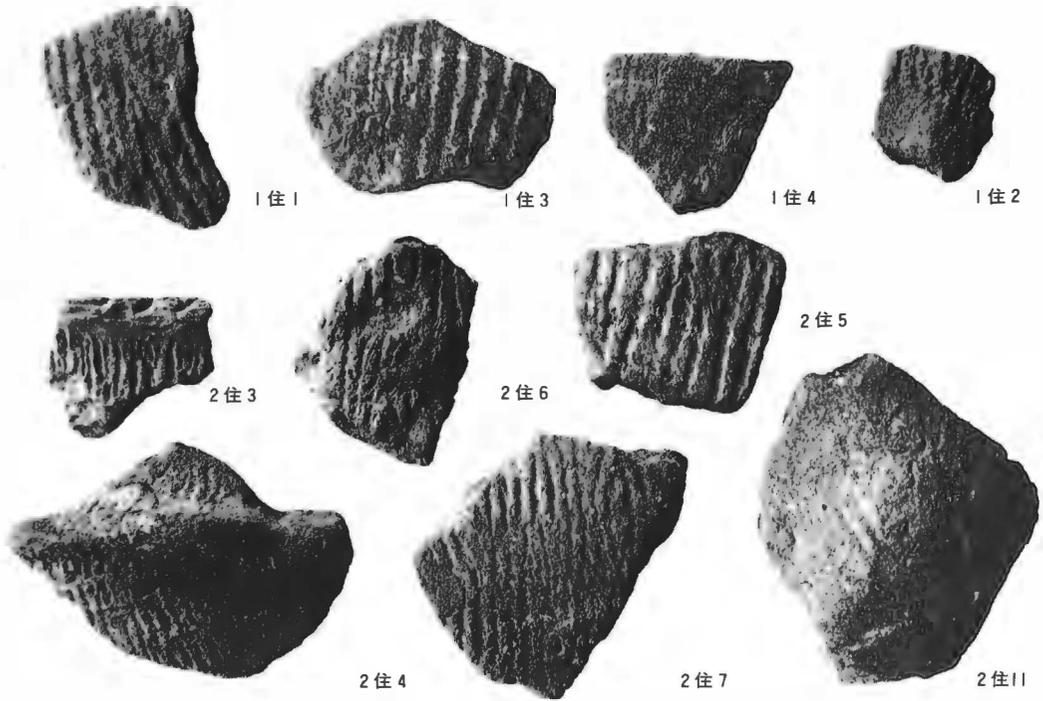
2 第8号土坑(南から)



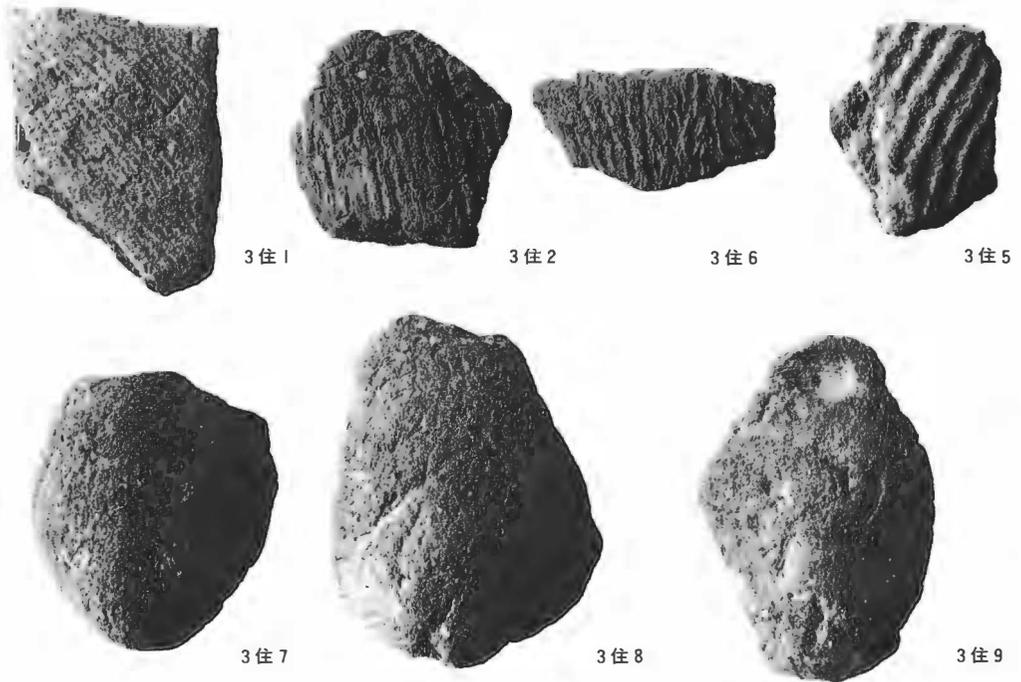
1 第1号土坑と堆積状況(西から)



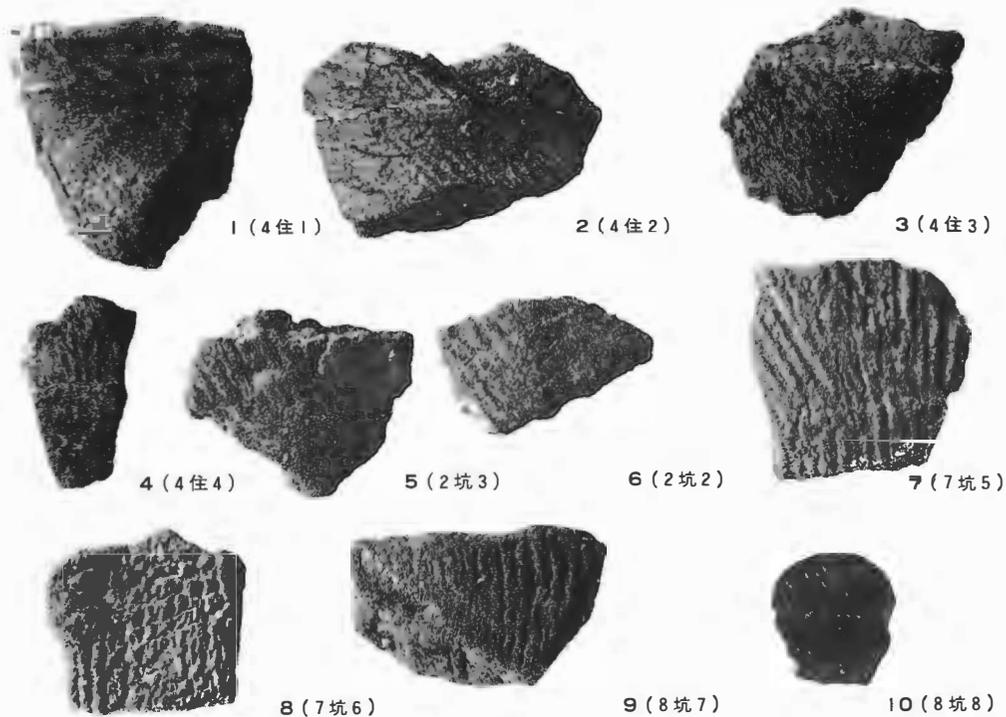
2 第9号土坑(東から)



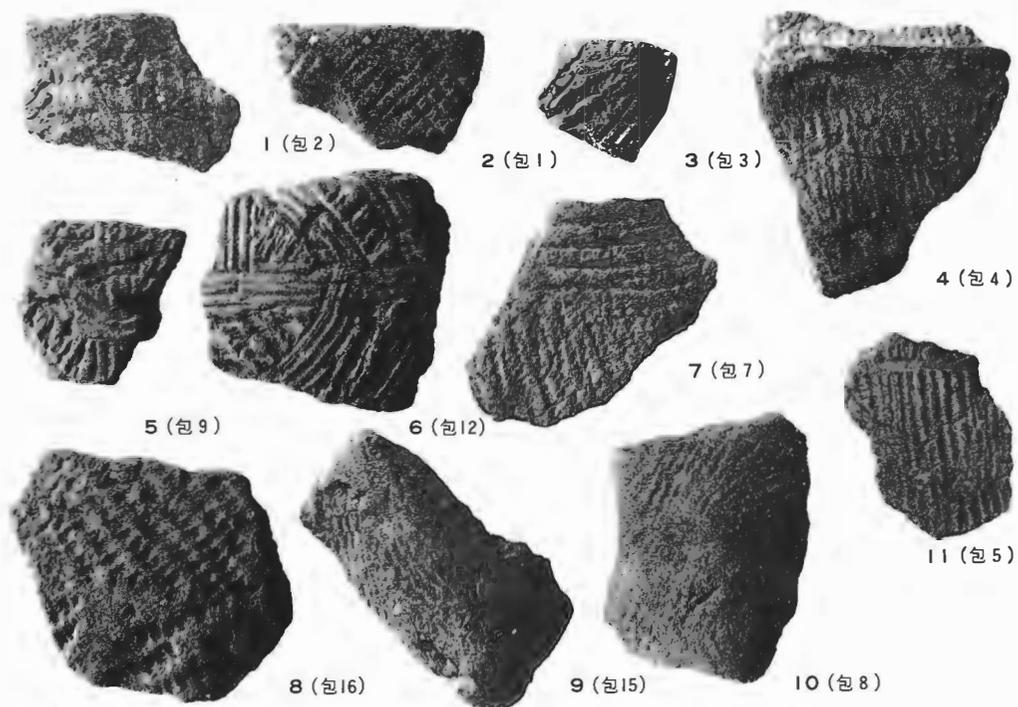
1 第1・2号住居跡出土の縄文土器



2 第3号住居跡出土の縄文土器



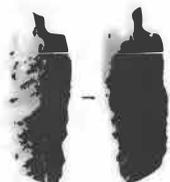
1 第4号住居跡, 第2・7・8号土坑出土の縄文土器



2 遺物包含層(Ⅱ層)出土の縄文土器



1



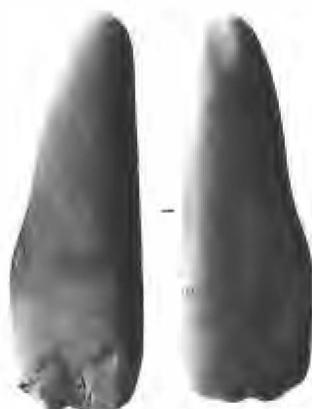
2



3



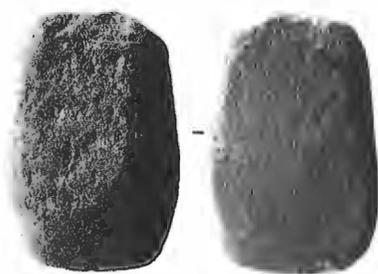
4



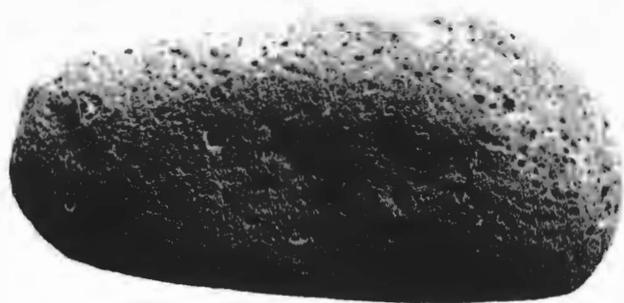
5



6



7



1



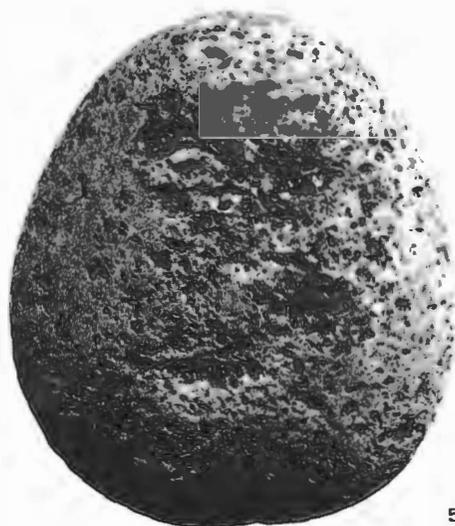
2



3



4



5

小高町文化財調査報告書第1集

1993年3月 発行

萩原遺跡

発行 福島県相馬郡小高町教育委員会
福島県相馬郡小高町東町三丁目22 ☎(0244)44-4114代
印刷 (有) 平電子印刷所
福島県いわき市平北白土字西ノ内13 ☎(0246)23-9051代

© 1993